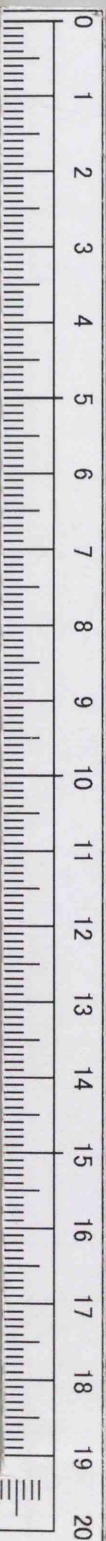


改新帝國讀本

卷六

375.9
Ha7
資料室



41556

教科書文庫

4
810
41-1930
2000301567

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

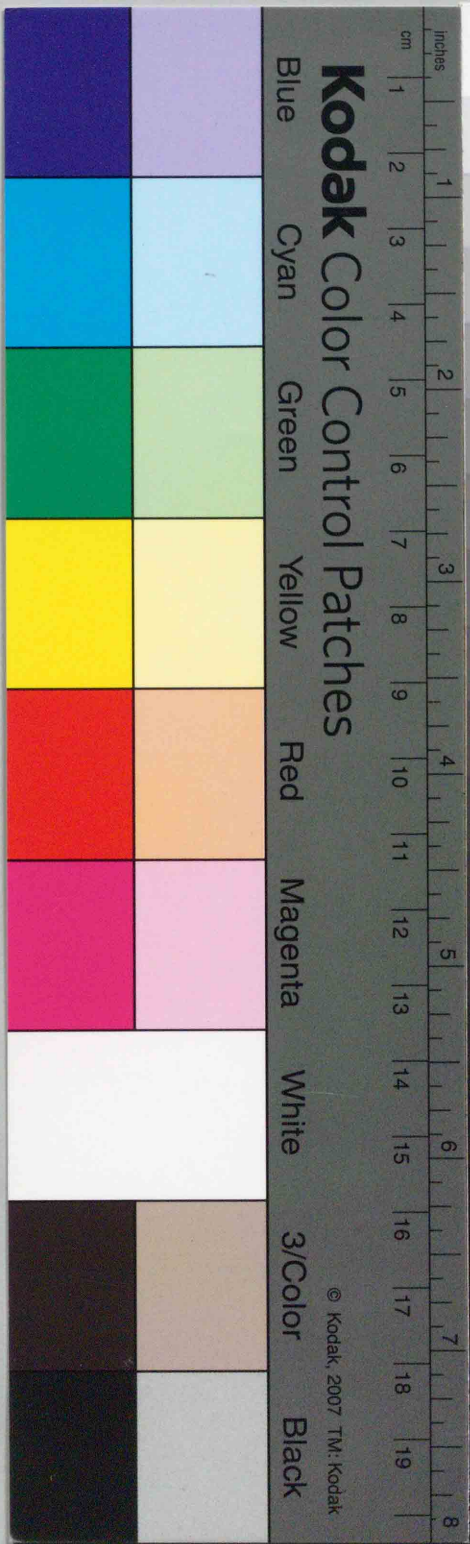


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak 2007 TM: Kodak



3759
H27

文部省檢定

昭和五年二月十四日 中國國語科用

改新帝國讀本

文學博士 芳賀 矢一 編
文學博士 上田 萬年 訂補
文學士 長谷川 福平

東京

合資會社 富山房發兌

改新帝國讀本

東京 合資會社 富山房發兌

文學博士 芳賀 矢一 編
文學博士 上田 萬年 訂補
文學士 長谷川 福平



流泉啄木

齋藤弓弦筆

廣島大學
圖書印



改新帝國讀本 卷六目次

一	野邊の秋風……………	一
二	日本人と自然美……………	四
三	朝鮮の美術その一……………	七
	柳宗悦……………	
四	朝鮮の美術その二……………	一六
	柳宗悦……………	
	美術の鑑賞(自修文)……………	二四
	川路柳虹……………	
五	みやびの物語……………	二九
	一 秋の青柳……………	(古今著聞集)……………二九
	二 王子猷……………	(唐物語)……………三一
	三 三船の才……………	(大鏡)……………三二

六	武藏野……………	國木田獨步……………	三三
七	秋窓雜記……………	北村透谷……………	四一
八	狐塚……………	(續狂言記)……………	四六
九	流泉啄木……………	(今昔物語)……………	五二
一〇	我が國の音樂……………	田邊尙雄……………	五六
一一	東大寺……………	薄田泣菫……………	六四
一二	松の下露……………	(太平記)……………	六七
一三	懷古……………	島崎藤村……………	七三
一四	我が國體と萬世一系の信條……………	黑板勝美……………	七七
	晚秋三信(自修文)……………	永井荷風……………	八六
一五	御即位禮拜觀……………	久米正雄……………	八九
一六	冬の山里……………		九九

一七	蔦温泉より……………	大町桂月……………	一〇一
一八	富士の冬……………	榎有恒……………	一〇五
一九	春の樂み……………	貝原益軒……………	一一五
二〇	扇の的……………	(平家物語)……………	一二一
二一	仁は心のいのち……………	室鳩巢……………	一二六
二二	文學と氣品……………		一三二
二三	國民の歌……………	中西悟堂……………	一三七
二四	佐久間象山の歌……………	佐々木信綱……………	一三九
	愛國の至情(自修文)……………	澤田謙……………	一四八
二五	人臣の道……………	北畠親房……………	一五九
二六	尊皇の精神……………	芝葛盛……………	一六三

附録

送假名一般

一四

二六	八景の歌
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇



改新帝國讀本 卷六

一 野邊の秋風

しら雲に羽うちかはし飛ぶかりの
 かずさへ見ゆる秋の夜の月

よみ人しらす

千年まで契
 し松も今日
 よりは君に
 ひかされてよ
 るつよやへ
 む(大中臣能
 宣の歌)

夕されば野邊のあき風身にしみて

子年まで契し松を夕よりは君よと
 けてしらすアヤつじ

藤原俊成

蹟筆成俊原藤傳

(一)江戸の國學者
 靜齋と號す
 の門人。安永
 七年(二四三
 三年)歿。五
 十三。或は五
 十七。
 (二)歌人。堀河、島
 朝に仕へた。
 金葉集の撰者

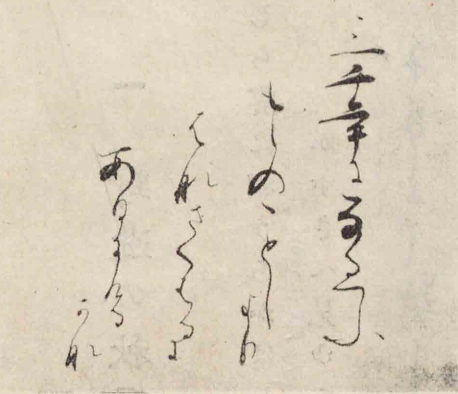
(三)歌人。建久二
 年攝政となつ
 た。建永元年
 (一八六六年)
 歿。年三十八。
 (四)俊成の子。新
 古今集の撰者
 仁治二年(一
 九〇一年)歿。
 年八十。

うづら鳴くなりふか草の里
 もののふの草むすかばね年ふりて

秋風さむしきちかうが原

源 俊 頼

(一) 加藤 宇萬伎



傳 藤 原定 家 筆 蹟

松風の音だに秋は寂しきに

ころもうつなり玉川の里

(三) 藤原 良 經

人すまぬ不破の關屋の板庇

あれにし後はたゞ秋の風

(四) 藤原 定 家

みわたせば花も紅葉もなかりけり

浦のとまやのあきのゆふぐれ

(一) 壬 生 忠 岑

山里は秋こそ殊にわびしけれ

鹿のなく音に目をさましつゝ

(二) 藤 原 資 宗

いかだしよ待てこととはん水上は

いかばかり吹く山のあらしぞ

小 澤 蘆 庵

くりもゑみ柿もいろづきうなぬらが

ほこらしげなる時は來にけり

賀 茂 眞 淵

しなのなるすがのあら野をとぶわしの

つばさもたわに吹くあらしかな

(一)藤原安綱の子
 古今集撰者の
 一人。

(二)参議藤原資房
 の子。

二 日本人と自然美

世界の各民族中、日本人ほど自然美を愛し、自然美を楽しむものはない。家屋、庭園の造築から始めて、一切の器具、服飾、一つとして材を自然美に取りらぬものはない。日本へ漫遊する外國人は、まづ街上に遊んでゐる女の子の美しい染模様の着物に驚き、次に博物館に入つては、刀劍、甲冑、古來軍人の用ひた一切の武器が、風流な花鳥を以て飾られてゐるのに感心する。仔細に觀察すれば觀察するほど、自然美に對する嗜好が、いかなる微細な點にまでも行きわたつてゐるのを歎賞する。紅葉形の煎餅、黄菊を象つた蒸菓子、これを盛る器はもとより、これを薦める部屋の欄間、襖、床の間の掛物、生花、何を見ても、外界美を縮圖したものでないのはいない。日光の東照宮を見物しては、その建築彫刻の美に驚くよりも、その輪郭、その色彩が、如

輪郭

捕捉

靜物

心理上

何にその美しい背景と調和を保つてゐるかを驚歎するのである。日本人は自然の形を保存して、しかも一層これを美化して、自然物を愛賞する。生花の術に於ては、花卉自然の枝ぶり、幹ぶりを、自然よりも一層美化して示す。盆栽も同様である。箱庭、盆栽の配置は自然の風光よりもその趣が更に多い。自然界の縮圖で、しかも自然美を構成してゐる急所、中心點を、巧に捕捉し得るのである。日本の繪畫が花鳥山水に勝れてゐるのは、いふまでもない。西洋畫題の靜物などと日本の花鳥畫とは著しく違ふ。

日本の文學は自然美を歌ふことがその生命である。古代の和歌から近世の俳句まで、概ね自然美を歌つた歎賞の聲である。自然美を愛するの極は、人事を以てすべて自然美と結合せしめてしまつた。喜怒哀樂、すべて吾人の心理上の状態は、皆自然美をいひあらはす語句を譬喩的に用ひてゐるのである。「百合花の榮ゆる」といひ、「夏

人事
推移

(一)源氏物語の女主人公
(二)秋好中宮

草のまどふ。といひ、思の煙。といひ、花の心。といひ、涙の露。といひ、袖の時雨。といふ、皆それである。單に春雨といひ、菜の花といひ、萩の花といひ、木枯といつても、日本人の心の中には、直ちにそれと聯想する幾多の人事が浮かぶのである。自然と人事とは全く融和して、一つになつてゐるのである。吾人の日常往復する手紙の文にすら、まづ時候の挨拶やら、四季の推移などを冒頭に置くのである。

一年四季の推移が如何に日本人の享樂を助けたか、如何にその注意を惹いたかといふことは、春秋の争が、古來未決の一問題であるのを見てもわかる。霞がくれに百花のとりどりに咲匂ふ春が佳いか、秋霧を分けて淡き濃き紅葉の色を尋ねる秋が佳いかといふことが、千年以上の歌人の争となつてから、歴代の國文學は思ひ思ひに、その論争に耽つてゐる。源氏物語にも春を愛づる紫の上と、秋を好くス中宮ウツノミヤとは、その代表的人物として描かれてゐる。日本人ほど

數寄を凝らす

(一)宗教哲學者、明治二十二年東京市に生まれた。宗教とそれの眞理、藝術と神に就いての著がある。

自然美に執着心の深いものはあるまい。昔の人は物の哀を知るのを理想とした。これは人情の美を知ると同時に、自然美を味はふことをいつたものらしい。人情美を知ることの出来る人は、自然美を味はふことも出来るし、自然美を理解する理想とした武士道も、これとは離れないで、所謂大和心といふのは、單に武勇一逼を意味するのではない。鎧の袖から刀の鐔に至るまで、風流の數寄を凝らした趣味も、この見地から理解が出来る。本居宣長の「大和心の歌」も、この意味を加へなければ、了解は出来ないと思ふ。

三 朝鮮の美術 その一

柳宗悦(一)

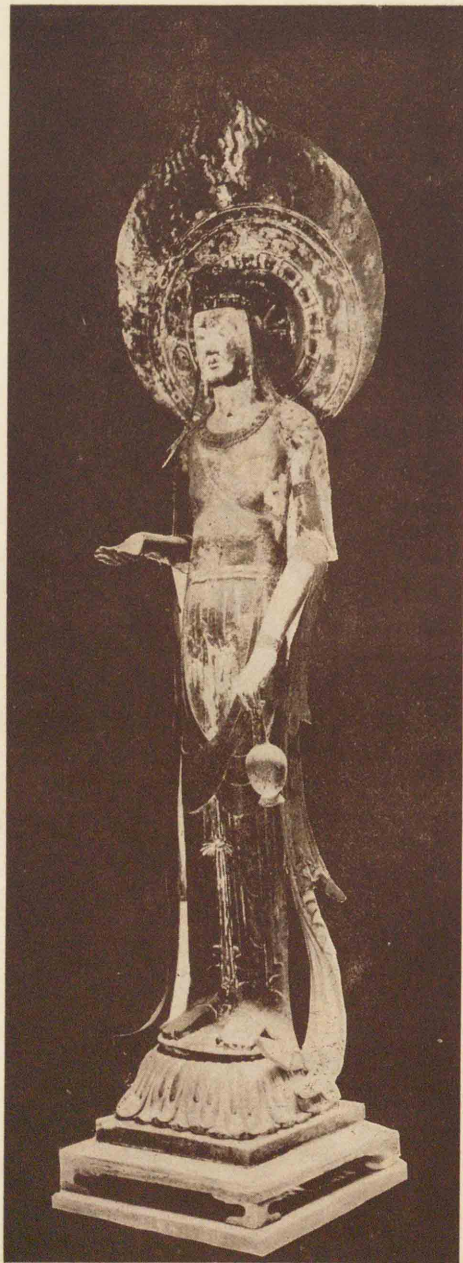
私は、朝鮮の歴史が苦悶の歴史であり、藝術の美が悲哀の美であ

ることを述べた。しかもその民族は、賢くも表現に必然な道を選ん
で形でもなく色でもなく、線に最も多くその心を托したことを述
べた。私はこの抽象的な概説から、實際の例證に移らねばならぬ。

試みに朝鮮の主都を尋ねて、南山に登り、その市街を展望して見
よう。眼にうつるのは、その家屋の屋根に現れる限りない曲線の波
ではないか。若しこの原則を破つて、その中に直線の屋根が見える
なら、それは日本かまたは西洋の建築だと断言していい。東京の小
高い丘に上つて市街を見おろす時と、如何に異つた感を受けるで
あらう。そこには殆ど直線があるのみではないか。曲線の波は、動く
心の徴である。都市は大地に横たはるといふよりも、波のまにまに
浮かぶのである。そこに眺め入る時、彼岸の渚を打つ音を微かに聞
く思がある。

あの法隆寺所藏の「百濟觀音」を想ひ浮かべよ。または夢殿に秘め

百濟觀音



られた觀世音の立像を心に浮かべよ。やうつむく頭から、肩に沿ひ靜かに體から足へと流れる、背高きその姿を目のあたりに眺めよ。特にその側面は美しいではないか。それは一つの形であるといふよりも、寧ろ流れる線である。垂れかゝる衣さへも共に流れてゐる。作者は何故に一般の形式を踏まずして、彼女に細き胴體と、高き丈と、思ひがちな風情と、流れるやうな姿の線とを寫し出したのであるか。私は朝鮮民族の血の中に、深く交へられた動かすことの出來ぬ特殊な性情を想はないわけにはゆかぬ。

新羅の舊都慶州から數里を隔てた吐含山上に、今有名な窟院が残つてゐる。景德王朝にゐた金大城の作だといふが、釋迦を中央に大小四十個近い佛像が刻んである。見る者は誰も驚くであらう。そこには固い石も柔く浮かんでゐる。特に窟内にある十一面觀音や、四人の女菩薩や、十人の弟子や、それ等のものが、如何に美しく刻ま

れてゐるであらう。美を飾つてゐるのは、同じやうに流れる幾條の線である。水に浮かぶ蓮花の上に、思に沈む姿が心の内に秘めて佇んでゐる。彼等こそ民族の親しい姉妹であり兄弟ではないか。人の



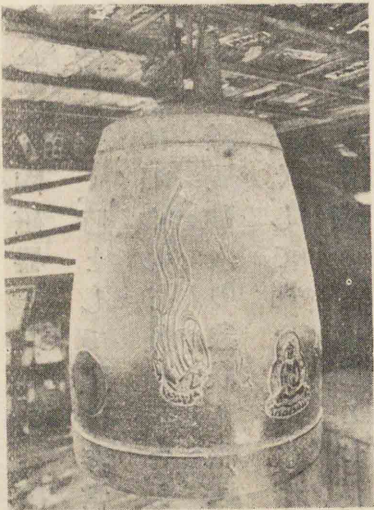
慶州石窟の釋迦

稀な峰の上の暗い窟院が、人々の巡禮したい場所であつた。中央に釋迦は黙坐する、而してすべてを知り、すべてを觀じ、慈念に溢れつゝ、すべての者に靜安な憩ひの場所を與へてゐる。

慶州といへば、私は、あの奉徳寺の梵鐘を忘れることが出来ない。それは恐らく美に於て東洋無比の鐘であらう。江原道の五臺山にある上院寺の梵鐘も美しいが、それ等のものに彫刻せられた飛天の圖を見よ。天女は衣と雲との波を分けて、流れるが如く浮かんで

ゐるではないか。あのやうな美しい人を魅する姿は、世に多くはないであらう。それは形の圖であるよりも線の圖である。

時代は溯るが、あの大同江附近にある高勾麗時代の壁畫に於て



新羅朝の梵鐘

も同じである。それは恐らく支那の様式を模したものであらうが、然し朝鮮の味はひがにじみ出てゐる。壁に畫かれた天女の圖を見よ。または四神、即ち玄武(北)と朱雀(南)と青龍(東)と白虎(西)とを見よ。こ

れ等死者を守護する力の神さへも、幅とか嵩とか重みとかの美によつて表されてゐるのではない。それは線の中にある模様だとさへいひ得るであらう。細くして長い曲線が、すべてを支配してゐる。それは線によつて示された圖様の極端な事例であらう。

我々は、建築とか彫刻とか繪畫とかに於てのみ、まがひもないこの特質を見得るのではない。あの朝鮮最古の天文臺である慶州の瞻星臺にすら、よき曲線が見られるではないか。一般工藝品に至るに及んで、我々は隨所に朝鮮の線を見ることが出来る。特に著しいのは、その陶磁器である。例へば一つの酒瓶をとらう。時として首は非常に長く、時として頸は非常に細い。口は屢、根元から上まで延ばされ、手は細くして且つ長い。あの有名な李王家博物館所藏の唐子葡萄模様辰砂入の象嵌青磁瓶は、その傑出した代表作であらう。すべては長くして細いが故に、形は不安である。然し線を求める要求は残りなく満されてゐる。如何に、これ等の細く長い部分が、實用には破壊され易く、不適當であらう。然し人々は、現世に望をもたぬ、實際的な要求を放棄して迄、曲線への要求を充たさうとした心理を忘れてはならぬ。

床に置かれ平らかな形をとる鉢に於ても、かゝる心理がひそかに働いてゐる。地につく高臺は小さく、鉢はその縁に於ていつも靜かな曲線を表してゐる。殆ど胴體のみをもつ幅廣い壺の如きものに於ても、人々は無意識にその要求を交へた。朝鮮の壺の代表的な形とは、如何なるものであるか。支那に於けるやうに、壺は圓みによつて安定されてゐるのではない。依然として、丈は高く、腰から足にかけて姿は非常に細い。さなきだに小さな高臺の輪を、斜に切落すことに於て、安定の度は更に失はれてゐる。それは、地上に置かれるが爲の形ではない。然しそれが朝鮮の姿である。どうしてかく迄に線への心理が働いてゐるのであらうか。私は民族によつて經驗せられた苦みと悲みとが、思はずもここに心を誘ふのであると想ふのである。寂しさは、祕められた寂しさであらう。頼るべき打明けるべき友

を持たない心であらう。内氣な黙した隠れた美が、かくして生まれ
たのではないか。あの模様を内に匿す象嵌の手法が、朝鮮に於て榮
えたことは、如何に必然なことであらう。あの淡い靜かな青磁の中
に、仄かに白や黒の^{アツキ}度しい色で、模様を内に沈ませた心の働を、何と
人は想ふであらう。この手法は、^{たれが描いたか}
陶磁器に於てのみではない。彼
等は、好んで鐵製の器に銀を刻
みこんで、模様を内に匿した。
恐らく朝鮮の陶磁器に於て
最も注意すべきことは、その殆
ど一切が、酸化焰でなく還元焰によつて焼かれたことであらう。還
元焰とは煙多き燻る焰である。彼等は好んでこの道を選んだ。燃え
きつた明るい焰は、彼等の知らない焰である。彼等は、煙によつて面



(窯麗高)瓶酒の磁青

を内に沈ましめ、靜かな涙多い心を語らうとしたのである。否、かく
することが、彼等のなし得たたゞ一つの相應しい手法であつたで
あらう。美はそこに現れる如くにして匿れてゐる。器は、^{うつくし}淡い水色の
釉薬の中に光を消しながら、靜かに佇んでゐる。何たるいぢらしさ
が、そこにあるであらう。好んで酸化焰に器を焼いた日本の陶工と
は、如何に明らかな心の對比であらう。一つは仄暗い、一つは明るさ
に過ぎた面を示してゐる。これが味ははれた異なる生活の状態で
あつた。我々は、光の豊かな、殆どすべてが窓である家を建てた。だが
朝鮮の人々は、光の少い壁の厚い窓の小さな家を選んだ。
たゞに陶磁器に於てのみ線の要素が勝つてゐるのではない。度
度我々の眼に觸れる高麗朝の匙の如きは、全く線の流だともいへ
よう。それが實に日常の器具であつた。これは例外ではない。どこに
も、我々は朝鮮の線を見ることが出来る。机の足にも、抽斗の環にも、

洞察

扇の柄にも、小刀の鞘にも、彼等の心が潜んでゐる。それ等のことを心なく看過してはならぬ。あの踏まれる足袋にも、泥にまみれてゐる靴の一端にも、同じ曲線の血が通つてゐる。よく我々に洞察の力さへあるならば、日常の器具を通じて、民族の希願や、引いてはその國の歴史や、自然を迄、理解することが出来るであらう。線の密意を解き得ない間、人は朝鮮の心に近づくことは出来ぬ。

四 朝鮮の美術 その二

私は、徐々に、朝鮮の藝術が何を語るかを明らかにし得たと思ふ。然し私は、尙もその特質を明らかにする爲に、更に二三の著しい事實を指摘して、私のいはうとする趣味を述べたく思ふ。例へば模様に現れた心を語つてみよう。朝鮮固有の模様の中で、特に有名なものは、蒲柳水禽の圖と、所謂雲鶴とであらう。特にこれ等

たわやか

の模様は、高麗燒とは離れ難い關係がある。何故朝鮮の人は、柳を好み水禽を描き、雲を愛し鶴を慕はしく思つたのであらう。誰にも自らその意味が解るであらう。この世に樹の數は多くあつても、柳の枝ほど長くして細い美しい線をもつものはないではないか。たわやかな流れるやうなその線は、無常なこの世に、休らひ得ない心の暗示ではないか。模様は柳の模様に於て、全く朝鮮の模様を示してゐる。その淋しげな柳の蔭に遊ぶ水禽は、何を語るものであらう。水は流れる水ではないか。それも線の流であらう。禽は、その水の流のまにまに浮かぶ禽ではないか。一時も不動な形を得ない水の流、一時も足を大地に踏むことのない浮かぶ水禽、これこそ、その半島の民族が、心に嘗めた親しい經驗の象徴ではないか。どこにそんなに寂しい美しい模様があらう、人は屢、汀に沿うて、まばらに生えてゐる浮草を、その傍に見るであらう。

附會

恐らく雲鶴の模様あやうずに於ても、同じ心の求めが讀まれるであらう。限りない大空の中に、一つ二つの切れ切れに浮かぶ寂しげな雲、またはその中をどこをあてどとなく飛行く二三の鶴、あの淡い沈みがちな水色のおもてにこの模様を見る時、夕ぐれ、高い空に一聲二聲物哀れげな響を残して、どこにか消えてゆく鳥の行方を追ふ思ひがする。鳥の類は多くあつても、丈高く足長く、細い羽に空を飛ぶのは鶴でないか。それは心に招かれた模様である。かく思ふのは附會であらうか。私はそこに匿された必然の意味があると思はないわけにはゆかぬ。

私はここに、線が朝鮮藝術の殆どすべてを支配してゐる特質であるのを指摘した。若しも、形と色との要素がそこに乏しいことを更に指示し得たら、私の見解はなほも正しい基礎を得てくるわけである。私は、このことに關しても興味深い幾多の事例をとること

が出来る。然し、強い形の缺乏に就いては、既に語る必要を見ないかと思ふ。なぜなら、細い曲線とか、丈高い姿とかは、自ら安定な形の美とは離れるからである。美が線に支配せられてゐるとは、それが強い形を缺くといふことを裏書する。私は轉じて、朝鮮に於ける色彩の缺乏について筆を新たにせねばならぬ。これが立證せられたら、何故その民族が表現の道として線を選んだかの理由を、一層はつきり知ることが出来るであらう。

支那やまた特に日本で、あのやうに色彩の多様な衣服が發達してゐるのに、なぜその隣國の朝鮮に、殆どこのことを見ないのであるか。用ひられる衣服の色は、何ものもの色をもたない白色ではないか。さもなくば、最も色を少くもつ淡い水色ではないか。年若い者も若い者も、男も女も子供も、一樣な白い着物を着るとは、如何なるわけであらう。この世に國は多く民族は多いが、このやうな奇異

な現象はどこにも見ることは出来ぬ。史家でない私は、かゝる衣服の制度が、いつの時代に起つたかを断定する根據をもたない。然し白い衣は、いつも喪服であつた。淋しい愼み深い心の象徴であつた。民は白衣を纏ふことによつて、永遠に喪に服してゐる。その民族が嘗めた苦痛の多い頼り少い歴史的經驗は、かゝる衣服を纏ふことを、寧ろ相應しくしてしまつたではないか。色に乏しいのは、生活に樂しさを缺くまがひもない證據ではないか。試みに朝鮮の人々が、白衣の通則を破つて、色に飾られる衣を選ぶ稀な場合を考へてみよう。たゞ樂しさが許されてゐる時のみ、人々は彩られた着物を着るのである。その民族に許されたかゝる場合が三つある。たゞこの三つの場合にのみ、衣は多様な色に飾られてゐる。三つの異例とは何々であるか。第一は、王公とか貴族とか、力あり富ある者によつて、屢衣に美しい色が用ひられる。理由は自明である。かゝる人々は安

定な幸福な生活を樂しみ得るからである。第二は、祝とか祭とか、人が喜び合ふ時に、朝鮮の人は、はやかな着物を着る。婚禮の衣裳は、どこに於ても美しい。あの正月とか端午の節供とかに於て、すべての若い者は喪服をぬぎすててゐる。一年中に於ての許された賑はしい幸な樂しい時だからである。第三は、あの無邪氣な、世の苦痛を知らないすべての子供である。子供ばかりは、屢、白衣の中に在つて、色様々な姿をする。實に、朝鮮に於て、色彩あるものを見る場合は、大概この子供らしい無邪氣な色を示してゐる。樂しさは色に飾られ、寂しさは色を離れるのである。たゞこの樂しさを許された三つの場合にのみ、朝鮮の人々は色を身に纏つてゐる。それは如何に必然な理由であらうか。かゝる樂しさをもたない時、すべての者は再び喪服に歸る。否、常にはかゝる樂しさをもたないが故に、白衣が選び得る常服である。この色彩を離れた世界が人々の住まねばなら

ぬ現し世であつた。形でもなく色でもなく、どこに彼等の心を托すべき表現の道があるであらう。残る線が、彼等に迎へられ愛せられた必然な理由に、人々は厚い理解をもたねばならぬ。

朝鮮の人々が色彩を樂しむ餘裕を缺いた例を、磁器に於ても見ることが出来る。磁器に於て、色彩が最も發達したのは、明の時代であつた。所謂上繪ウエに於て、色は絢爛ケンランな美を競つたのである。支那から日本に傳へられるに及んで、色彩は一層賑はしくせられた。九谷にしろ鍋島にしろ赤繪は、その生命であつた。共に支那に於て、日本に於て、かく迄に發達した上繪の手法が、あの磁器の時代であつた。李朝に於て、少しも採用せられなかつたのは何故であるか。全く、人々が色を樂しむ心の餘裕をもたなかつたからであらう。李朝には、眞に永遠な陶磁器がある。だが用ひられた顔料は、藍と鐵砂と、僅かばかりの辰砂とである。それもすべては度ましい色調であつて、華か

絢爛

な牙えたものを見る場合は少い。私は屢、それ等のものに見とれて、作者の心に働いてゐる寂しい感情を思はないわけにはゆかぬ。

朝鮮の生活が、一般に樂しさを缺いてゐたといふ實例を、もう一つ添へておかう。それは、子供が遊ぶ玩具の極めて少い事實である。玩具とか人形とか、その種類の豊富なことに於て、支那も日本も共に世界に知られてゐる。それなのに、この二つの國の間にある朝鮮に於て、それを見る場合が極めて少いのは何故であるか。このこともまた、今迄私がいはうとした事柄を裏書してゐるではないか。同じことが陶磁器に於てもいへる。世界のいづこに於ても、燒物の最も多い用途の一つは、花瓶である。然るにあの陶器の國といはれる朝鮮に、花瓶が殆どないのは何故であるか。人はあの色に、美しい花を樂しむ心をもち得なかつたからであらう。音樂に至るなら、尙一層この特質を認め得るであらう。私は、室に

於て、また路傍に於て、屢、朝鮮の音楽を聞くことが出来た。然しそれを聞く毎に、寂しい頼りない物哀れな感情に胸を壓せられてくる。連々として沈むが如く、失せるが如き長き音律、音にも同じ朝鮮の線が流れてゐると私はいつも思ふ。それはどこ迄も、哀傷の音楽である。あの張裂けるやうな支那の音楽の強さと、如何に著しい對比であらう。

自修文

美術の鑑賞

川路柳虹

—信と美—

(一) 畫家、詩人、名は誠。明治二十一年東京市に生れた。路傍の詩集。曙の聲。花の温室。歩む人の他。美術批評を多く發表してゐる。

美術

繪、彫刻、建築など美を表現することを目的とするわざ。

偶然 おもひがけなくふと。

すべて美術といふものは、何に限らず、味はふことによつて價値が出てくるものです。どんな作品にせよ、美術家が精神を籠めて作つたものである以上、これを観る人は、その苦心の跡を考へることが必要です。作品が決して偶然に出来るものでない以上、その作品はどういふ風にして出来たかを考へ、そして、それを觀て自分はどうか感じたかといふことを思つて見るのが、美術を味

個性

そのもの特有な性質。

はふことです。この「味はふ」ことを鑑賞と申します。畢竟、繪でも、彫刻でも、これを作つた人は、自然について感じたことをそれに表したのですから、その表したものは、即ち作者自身の考や、ものの見方の態度を示したものであるといへます。それ故、一つの美術品を味はふことは、單に作品を味はふことではなく、その作品を作つた作家の精神を味はふことになります。同じ林檎の繪でも、甲の人のかいたものと、乙の人のかいたものとは、色も、形も、すべて相違してゐます。それはなぜかといふに、作者がそれぞれ自分自身の個性によつて、同じ色でも、甲はこれを強く表し、乙は非常に弱い調子で表すといふ風に、その作者の心持や感じが異なるからです。その異なる所に個性の差が生ずるのであり、美術上の作品は、各作者の異なる個性を表すから面白いのです。美術家は一般の人がなん等の注意も拂はない所に非常な注意を拂ひ、人の氣付かない所に美を發見します。一般の人でも夕日の美し

漠然
ばつとして明
らかでないさ
ま。

さは漠然ながら知つてゐませう。然し、その夕日が樹の間を洩れる微妙な光だとか影だとかに對して、どれだけ深く注意するかといふことは疑問です。美術家は自然のさういふ微細な點にまでも常に注意してゐますから、そこから人の常に看過してゐるものに對して、非常に美しいものを發見してくるのです。ですから、繪や彫刻を観るといふことは、一面には、さういふ自然に對して私たちの看過してゐる美を、美術家によつて教へられるといふことになります。美術品の味はふことは、その味はふことによつて、常にはなんでもなく見えてゐた自然が、かうも美しいものであるかといふことを、ほんたうに知るところにあります。

私はよく、私には美術はよくわからない。とか、どこが善いのか悪いのか見當がつかない。とかいふことを聞きます。この「わかる」といふことは、無論その作品を理解することを意味しますが、然し、美術品を理解するには、科學などを理解するやうに、たゞ理窟

理智
わきまへ知る
知識。

にだけ依つてはいけません。勿論、理智も必要ではありますが、美術品は理窟によつて解する以外に、「感ずる」といふことが必要です。だから、美術の鑑賞には、「どういふ風に理解したか」といふことよりも、「どういふ風に感じたか」といふことが肝腎です。なんとなれば、美術品はやはり人の感情に訴へるもので、何よりも人を感じ動させるものですから、これを観てなん等の感じも起らないといふなら、それはその作品が美術品としての資格を備へてゐないか、或はこれを観る人が感情に乏しいかに因るのです。ここに感情といふのは、悲しいとか、嬉しいとかいふことを意味する感情ではなく、むづかしくいへば、感性といふべきもの、即ち感ずる心のあることをいふのです。感性がなければ、ほんたうに美術品の鑑賞は出来ません。結局、美術を味はふといふことは、自分の氣持を以てその作品を観るといふことです。

それでは、如何にすればさういふ風に、自分の感情で美術品を

虚心平氣
心があつさり
してゐるて氣も
ちのおだやか
なこと

邪念
れじけた心

理解することが出来るかといふに、それには、まづ虚心平氣で作品を観ること、なん度もなん度もこれを熟視すること、その技巧を知ることに、これ等の條件が必要です。作品を味はふ爲には、徒に他人の噂や評判などに動かされないで、自分でどれを好むかといふことを考へるべきです。その爲には、まづ作品の前に立ち、邪念を去つて、作品と自分とだけが相對し、それをなん度もなん度も熟視してゐることです。そのうちに、いろいろなことがわかつて來ます。さて、それから一般の技巧即ち作品の技術を見るのです。巧であるとか、拙いとかいふことは、要するに比較ですから、澤山な作品を観た上でなければわかりません。澤山な作品を熟視することは、美術の鑑賞上最も必要です。そして、次には、その作品がどういふ風にして出來てゐるかといふ技巧を知ることが必要です。これは多少美術上の知識を養はなければなりません。それが、それは急に一時に知るわけにはゆきません。樂譜に關する根本

油繪
西洋畫の主な
もので、油繪具
でかいた畫
水彩畫
油繪の對、水
具を用ひてか
いた畫
調子
英語 Tone の
譯、色の濃淡
筆觸
英語 Touch の
譯、筆の調子
筆くせ
様式
英語 Style の
譯、畫の流派
圖から

(一) 建長年間(一
九〇九年)の
人傳未詳、古
今著聞集の著
者
(二) 源有仁、白河
天皇の御孫、
詩歌管絃をよ
くした。久安
三年(一八〇
七年)薨、年四
十五

の知識に缺けてゐては、せつかく音樂を聴いてもわからぬやうに、よく美術品を理解するには、やはり一通り技術に關する知識を有する必要があり、ます。油繪と水彩畫との差、繪具の名前、それから、調子とか、色とか、筆觸とか、様式とかいふやうなことも、その意味くらゐは心得てゐなければなりません。

五 みやびの物語

一 秋の青柳

(一) 橘 成 季 得意の歌

(二) 花園左大臣家に始めて参りたりける侍の名簿のはしがきに、能は歌よみ」と書きたりけり。おとど秋の初、南殿に出でて、はたおりの鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、下格子に人参れ。と仰せられけるに、藏人五位たがひて、人も候はず」と申して、この侍参りたるに、たゞさらば汝おろせ」と仰せられければ、参りたるに、汝は歌よみな」とありければ、畏まりて、御格子おろし、さして候ふに、このは

青柳の結む古りてを
たつてて秋にはばさ
なく、

はるかすめたる
にかえつて
つたかりか
はるかに
秋雁給ふ
のありて

(一)第五十九代宇
多天皇の時の
年號
(二)紀友則
(三)古今集卷四に
出てる

たおりをば聞くや、一首つかうまつれ、と仰せられければ、青柳の、と
初めの句を申し出したるを、さぶらひける女房たち、をりに合はず
と思ひたりげにて、笑ひ出したれば、ものを聞きはてずして笑
ふやうやある、と仰せられて、疾くつかうまつれ、とありければ、
青柳のみどりの絲をくりおきて

と詠みたりければ、おとど感じ給ひて、萩おりたる御直垂おし出し
て、賜はせけり、

寛平の歌合に、初雁を友則、

はる霞かすみていにし雁がねは

今ぞなくなる秋霧のうへに

と詠める。左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人
こゑごゑに笑ひけり。さて次の句に、かすみていにし、といひけるに

(一)二十卷、神祇
釋教等二十項
に分類して古
今の話説をあ
つめたもの

(二)支那晉の人
名は徴子、
ほださる

高瀬船

(三)支那晉の人
名は遠、安道
はその字、書
畫に巧で、琴
をよくした

こそ、音もせずなりにけれ、同じことにや、
昔、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひにほだされ
ずして、たゞ春の花、秋の月にのみ心を澄ましつゝ、多くの年月を送
りけり。事に觸れて情深き人なりければ、かき曇り降る雪はじめて
晴れ、月の光清く凄じき夜、一人起きゐて、慰め難くや覺えけん高瀬
船に棹さしつゝ、心に任せて戴安道を尋ね行くに、道のほど遙かに
て、夜も明け月も傾きぬるを、本意ならずや思ひけん、かくともいは
で、門のもとより立歸りけるを、いかにと問ふ人ありければ、
もるとともに月見んとこそ思ひつれ
かならず人に逢はんものは
とばかりいひて、遂に歸りぬ。心の好きたるほどは、これにて思ひ知
るべし。戴安道は剡縣といふ所に住みけり。この人の年頃の友なり。

高瀬船の物語
五 みやびの物語

(一)二卷。大和物語に對して、國文にて記し、未詳のもの。作者未詳。

(二)藤原道長。京都の西風山の上流を流れる桂川と下流を流れる川といふ。

(四)權大納言藤原公任の子。關白賴朝の忠臣。詩歌の才人。樂を善くし、和漢朗詠集の著者。長久二年(一〇七〇)十一月六日歿す。

同じさまに心を澄ましたる人にてなんはべりける。

三 三船の才
ひととせ入道殿の大井川の逍遙させ給ひしに、作文の船管絃



(筆方義田花)遊御の船三

へるを、入道殿かの大納言いづれの船にか乗らるべき。と宣はすれば、和歌の船に乗りはべらん。と宣ひて、詠み給へるぞかし。

唐物語

小倉山

申しうく

(一)八卷。作者未詳。文徳天皇の嘉承三年(一一一三)から後一條天皇の萬壽三年(一一三二)までの七十六年間の出来事。假名文の歴史。

(二)小説家。名は哲夫。千葉縣三十八年(一八八七)武蔵野の運命論者。野村胡堂の著者。記述の著者あり。

をぐら山あらしの風の寒ければ

紅葉のにしききぬ人ぞなき

申しうけ給へるかひありて、あそばしたりな。御みづからも宣ふなるは、作文の船にぞ乗るべかりける。さてかばかりの詩を作りたらしましかば、名のあがらんことも勝りなまし。口惜しかりけるわざかな。さて殿の「いづれにとか思ふ」と宣はせしになん、われながら心驕せられし。と宣ふなる。ひと事の優るに、かくいづれの道にもぬけいで給ひけんは、古もはべらぬことなり。

六 武蔵野

國木田獨歩

昔の武蔵野は、萱原のはてもない光景で、絶類の美を鳴らしてゐたやうにいひ傳へてあるが、今の武蔵野は林である。林は實に今の武蔵野の特色といつてもよい。その木はおもに檜の類で、冬は悉く

『Turgeneff』
 ロシヤの小説家、西暦一八八三年—一八八八年、長谷川辰之助の愛知縣人、明治四十一年、四月十八日歿。

落葉し、春は滴るばかりの新緑が萌出る。その變化が秩父嶺以東十數里の野一齊に行はれて、春夏秋冬を通じ、霞に雨に、月に風に、霧に時雨に雪に、緑蔭に紅葉に、さまざまの光景を呈する。その妙は、ちよつと西國や東北地方のものにはわかりかねる。元來日本人は、これまで檜の類の落葉林の美を餘り知らなかつた。林といへば、おもに松林のみが日本の文學、美術の上に認められてゐて、歌にも、檜林の奥で時雨を聞くといふやうなことは頗る稀である。自分はツルゲ一節を愛讀する。

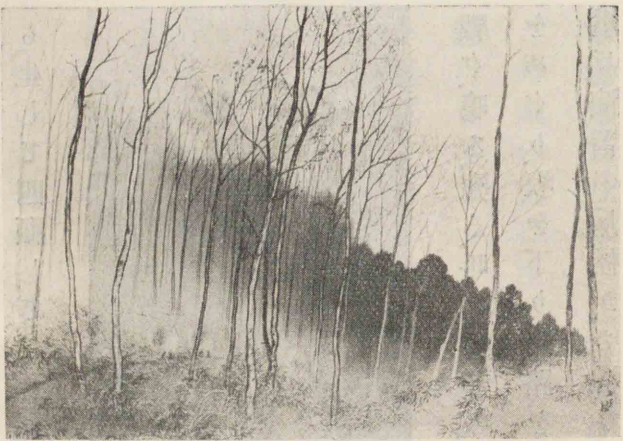
秋九月中旬といふ頃、一日自分がさる樺の林の中に坐してゐたことがあつた。朝から小雨が降りそゞぎ、その時間にはをりをりなま暖な日影も射して、まことに氣まぐれな空合。あはあはしい白雲が空一面にたなびくかと思ふと、ふとまたあちこち瞬く

さかしげ

間雲切がして、無理に押分けたやうな雲間から、澄んでさかしげに見える人の眼の如く、朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は坐して、四顧して、そして耳を傾けてゐた。木の葉が頭上で幽かに戦いだが、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する面白さうな笑ふやうなさゞめきでもなく、夏の緩やかな戦ぎでもなく、長たらしい話聲でもなく、また秋の末のおどおどした薄寒さうなお饒舌でもなかつたが、たゞ漸く聴取れるか聴取れぬほどのしめやかな私語の聲であつた。そよ吹く風は忍ぶやうに梢を傳はつた。照ると曇るとで、雨にじめつく林の中の様子子が、間斷なく移り變つた。或はそこにありとあるものすべてが一時に微笑したやうに、隈なくあかみわたつて、さのみ繁くもない樺の細々とした幹は、思ひがけずも白絹めく優しい光澤を帯び、地上に散布いた細かな落葉は俄に目に映じて、眩きまでに金

〔蕨の類〕
ものあいり

色を放ち、頭を掻きむしつたやうな、^(一)バアボロトニクの見事な莖、
しかも熟れ過ぎた葡萄めく色を帯びたのが、際限もなくもつれ
つからみつして、目前に透かして見られた。
或はまた、四邊一面俄に薄暗くなりだして、瞬く間にもものあ
いろも見えなくなり、樺の木立も、降積つた儘でまだ日の眼に逢
はぬ雪のやうに、白くおぼろに霞む。——と、小雨が忍びやかに怪
しげに私語するやうに、ばらばらと降つて通つた。樺の木の葉は
著しく光澤がさめても、さすがになほ青かつた。が、たゞそちこち
に立つ稚木のみは、今はすべて赤くも黄色くも色づいて、をりを
り日の光が、今雨に濡れたばかりの細枝の繁みを漏れて、滑りな
がらに脱けてくるのを浴びては、きらきらと煌いた。
自分が落葉林の趣を解するに至つたのには、この微妙な叙景の
筆の力が多い。これはロシヤの景で、しかも林は樺の木で、武藏野の



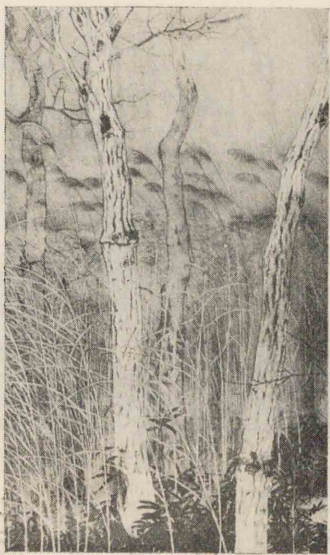
(川合玉堂筆)

暮 林

林は樺の木、植物帯からいふと甚だ異なつてゐるが、落葉林の野で
あることは同じである。自分は屢、思つ
た、若し武藏野の林が樺の類でなく、松
か何かであつたら、極めて平凡な、變化
に乏しい色彩の一樣なものとなつて、
さまざま珍重するに足らぬだらうと。
樺の類だから黄葉する。黄葉するか
ら落葉する。時雨がさゝやく。木枯が叫
ぶ。一陣の風小高い丘を襲へば、幾千萬
の木の葉高く大空に舞つて、小鳥の群
のやうに遠く飛去る。木の葉が落ちつ
くせば、數十里の方域にわたる林が一時に裸體になつて、蒼ずんだ
冬の空が高くその上に垂れ、武藏野一面が一種の沈靜に入る。空氣

諦視

が一段と澄みわたる。遠いもの音が鮮かに聞える。自分は日記に「林の奥に坐して四顧し、傾聴し、諦視し、默想す。」と書いた。ツルゲーネフも、坐して四顧して、そして耳を傾けた。」と書いてゐるが、この耳を傾



(筆郎太徳森藤)野藏武の枯冬

けて聴くといふことがどんなに秋の末から冬へかけての今の武藏野の心になつてゐるだらう。秋ならば林のうちから起る音、冬ならば林の彼方に遠く響く音、鳥の羽音、囀る聲、風の戦ぐ、鳴る、嘯く、叫ぶ聲、叢の蔭、林の奥にすだく蟲の音、空車、荷車の林をめぐり、坂を下り、野路を横ざる響、蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か、さもなくば夫婦連で遠乗に出かけた外國人である。何事をか聲高に話しながら行く村のもののだみ聲。それもい

鷹揚な趣

- (一) 東京府豊多摩郡中野町
- (二) 東京府豊多摩郡澁谷町、東京市の西郊
- (三) 東京府荏原郡世田ヶ谷町、澁谷町に接してゐる
- (四) 東京府北多摩郡、櫻の名所

つしか遠ざかつて行く。獨り寂しさうに道を急ぐ女の足音。遠く響く砲聲。隣りの林でだしぬけに起る銃音。時雨の音に至つては、これほど幽寂なものはない。昔から和歌の題にまでなつてゐる。廣い野末から野末へと、林を越え、森を越え、田を横ぎり、また林を越えて、忍びやかに通り過ぎる時雨の音の、いかにも静かで、また鷹揚な趣があつて、優しく懐かしいのは、實に武藏野の時雨の特色であらう。自分は曾て、北海道の深林で時雨に遭つたことがある。これはまた人跡絶無の大森林であるから、その趣は更に深いが、そのかはり武藏野の時雨の、人懐かしくさゝやくやうな趣はない。

秋の中頃から冬の初試に、中野あたり、或は澁谷、世田ヶ谷または小金井の奥の林を訪うて、暫く坐つて散歩の足を息めて見よ。これ等のもの音の忽ち起り、忽ち止み、次第に近づき、次第に遠ざかり、頭

関千

(一)國學者、周防國岩國の人。文久二年(一八六二)年八十一。歿。

上の木の葉が風なしに落ちて微かな音を立て、やがてそれも止んだ時、自然の静肅を感じ、永遠の呼吸の身に迫るのを覚えるであらう。武藏野の冬の夜更けて星斗関千と冴えた時、星をも吹落しさうな木枯が凄じく林をわたる音を、自分は屢、日記に書いた。風の音は人の思を遠くにさそふ。自分はこのもの凄風風の音の、忽ち近く忽ち遠いのを聞いては、遠い昔からの武藏野の生活を思ひつゞけたこともある。

(一)

熊谷直好の歌に、
夜もすがら木の葉片よる音きけば
といふのがある。自分は山家の生活を知つてゐながら、この歌の心をげにもと感じたのは、實に武藏野の冬の村居の時であつた。
林に坐つてゐて、日の光の最も美しさを感じるのは、春の末から



筆 雅光野 狩

野 藏 武

(一) 栃木縣上都賀郡。山水秀麗の地である。
(二) 群馬縣碓氷郡と長野縣北佐久郡との境。紅葉の名所。

(三) 詩人、思想家。名は門太郎。神奈川縣の人。明治二十七年歿。透谷全集二卷がある。

五情を沒了す

夏の初で、その次は黄葉の季節である。半ば黄色く、半ば緑な林の中を歩いてゐると、澄みわたつた大空が梢々のすき間からのぞかれて、日の光は風に動く葉末葉末に碎け、その美しさはいひつくされぬ。日光とか碓氷とかいふ天下の名所はともかく、武藏野のやうな廣い平原の林が隈もなく染まつて、日の西に傾くと共に一面の火花を放つのも、特異の美觀ではあるまいか。

武藏野

七 秋窓雜記

北村透谷

悲しきものは秋なれど、また心地よきものも秋なるべし。春は俗を狂せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を酔はしむると月の人を清ましむるとには、自ら味はひを異にするものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは、世俗の免るゝ能は

紅塵萬丈
身事匆忙
駕御

ざるをたゝるながら、我は萬木凋落の期に當り、靜かに物象を察するの快なるを選ぶなり。
 希望は人を欺き易きものぞ、今年の盛夏鎌倉に遊びて、あること僅かに二日思へらく、この秋こそはここに來りて、よろづの秋の悲しさを味ははんと。圖らざりき、身事匆忙として、空しく中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。されど秋は鎌倉に限るにあらず人間到る所に詩界の秋あり。欺き易き希望を駕御するの道はこれにこそあれ。
 我が庵もまた秋の光景には洩れざりけり。喉鳴きやぶるばかりの鶉の聲々高き梢に聞ゆるに、窓開きてそこにかにかとうち見れば、そこにもあらず、ここにもあらず。窓を閉ぢて書を繙けば、一層高

微恙

く聞ゆなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なれど、秋の聲ぞと聞けば、その面白さ讀書の類にあらず。
 四 病みて他郷にある人の身の土を氣遣ふは、人も我も變らじ。されど我は常に健全なる人の、たまたま病みて臥床するを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは、富める人の道に入り難きに等しからん。世には體健かなるが爲に心健かならざるもの多ければ、常に健かなるもの十日二十日病床に臥すは、さまで恨むべきにあらず。ましてこの秋の物色に對して、命運を學ぶこよなきたよりあるをや。かく我は眞意を以て微恙ある友に書遣れり。
 五 萩薄我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如くこれ等の草花を珍重すること能はず。我は荒漠たる原野に、名も知らぬ花を愛づる



(筆 濤 秋 畑 田) 鴉

心はあれども、園藝の些技にて作り出でたる矮小なる自然の美を、さほどに嬉しと思ふ情なし。さはいへど、敢て在來の詩人を責むるにはあらず、また自己の愛するところをいはんともあらず。たゞ我が秋に對する感の一として記すのみ。

六

鴉カこそをかしきものなれ、我が山庵の窓近く下立ちて、我をながし目に見おこしたる後、逐へども去らず、叱すれども驚かず、やともしれば、脚を立て首を揚げて、飛去らんとする氣色は見すれど、我が害心なきを知ればにや、たゞ足を揃へて跳り歩くのみ。

局量

七

浮世は廣ければ、かゝる曲者を置きたりとして、何の障にもなるまじけれど、その芥ある所に集り、穢物ある所に群がるの性あるを見ては、人間の往々これに類するもの多きに想ひ到りて、聊か心悪くなりたれば、物を投ぐる眞似しけるに、忽ちに飛去りぬ。飛去る時、かあかあと鳴く聲は、我が局量を嘲るものの如しげに、皮肉家といふもの、文界のみにあらざりけり。

夜更けて枕の未だ安まらぬ時、こほろぎの聲を聞くは、眞の秋の情なるらん。その聲を聞く時に希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて、秋のみ胸に充つるなり。松蟲、鈴蟲のみ秋を語るにあらず。古書、古文のみ物の理を我に教ふるにあらず。一こほろぎの爲に我は眠の惜しまれて、物思なき心に思を宿しけり。

八

芭蕉の葉色秋風を笑ひて籬を蓋へる微かなる住家より、ゆかしき音の洩れきこゆるに、そが中をうかゞひ見れば、年老いたる盲女の琵琶を弾ずる面影凜乎として俗世のものにあらず。その律調の端正なること、今の世の浮華なる音楽に較ぶべからず。嬉しきことに思ひぬ。

透谷集

八 狐塚

主このあたりのものでござる。某山田を數多もつてござる。當年は殊の外よう出來てござる。さりながらこの頃は鹿猿貉が田を荒します。太郎冠者を呼出し、山田の番にやらうと存ずる。やいや、太郎冠者あるか。太はあ、御前に居ります。主、汝を呼出すこと別のことでない。當年は身どもの山田が殊の外よう出來た。それにつき、

氣の毒

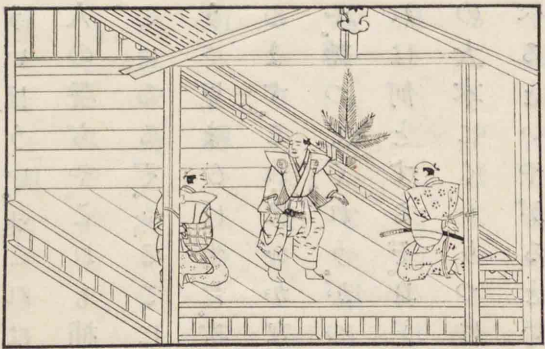
大儀

この頃は鹿猿が田を荒すほどに、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば追うて番をせい。太、畏まつてござる。私一人でござるか。主、いや、後ほどは次郎冠者も見まひにやらうほどに、まづ行け。太、心得ました。主、さりながらこの中ぢやは、狐塚の狐が出てばかすといふほどに、ばかされぬやうにして番をせい。太、それはこはいこととござる。もはや参ります。主、あす早々歸れ。太、はあ、さてもさても迷惑なことをいひつけられた。夜晝使はるゝといふは氣の毒なことぢや。参るほどにこれぢや。まづこれにゐて番をいたさう。

主、太郎冠者を山田へ番に遣してござる。定めて寂しうして居るでござらう。次郎冠者を見まひに遣さうと存ずる。やいや、次郎冠者あるか。次、これに居ります。主、汝は大儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽かをしてやれ。次、畏まつてござる。主、小筒こさへも少し持つて行け。次、心得ました。これはさて迷惑なれども、参らざるまい。主、命ぢ

や、是非に及ばぬ。これは暗うて、どこやら知れることでない。呼ばはつて見よう。ほうい、ほうい。太郎冠者やい。どこにゐるぞ。太、さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかさるることではないぞ。まづ眉毛をぬらさう。次、ほうい、ほうい。太、ほうい、ほうい。ここにゐるは。次、どこにゐるぞ。太、ここにゐるは。やあ次郎冠者か。次、なかなか。頼うだ人にいひつけられて、伽に來たは。太、ようこそおりやつたれ。さてもさてもようばけた。その儘の次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向うの山から大きな鹿が出たを、身どもが追うたれば、此方の山へくわらくわらと逃げたは。次、それはでかした。太、どつこへ、やることではないぞ。次、これは何とすぞ。太、何とするとは狐め。ばかさるゝことではないぞ。次、おれは次郎冠者ぢや。太、何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつて置いて。狐殿よい體なまの。おのれ今に皮を剥いでくれうぞ。

主、太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣してござる。心もとなうござる。見に參らうと存ずる。ほうい、ほうい。太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほうい、ほうい。太、これはいかなこと。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。ほうい、ほうい。主、ほうい、ほうい。どこにゐるぞ。太、ここにゐます。主、やあ、ここにゐるか。寂しからうと思つて見まひに來た。次郎冠者を先へおこしたが。太、なかなか。あれにゐます。これはいかなこと。これもようばけた。そのまゝ、頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝことではないぞ。主、これは何とするぞ。身どもぢや。太、おのれもようばけた。まづ縛つて、この大木にくゝりつけて置いて、いたしやうがある。狐は松葉でふすべるといやがるといふ。ふすべてやらう。さあさあ尾を出せ。鳴け鳴け。主、おのれ太郎冠者め。主をこのやうにして、罰あたりめ。太、何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者もふすべてやらう。さあさあ鳴け鳴け。



狐塚 狂言記所載

こんこんといへ。次、これは何とする。太、あれやあれや、いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて来て、皮を剥いでくれうぞ。待つてをれ。ようばかさうと思ふたなあ。鎌を取つてくるぞ。主、さてもさても氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。次、さやうでござる。こなたは頼うだ御方か。主、なかなか。汝も縛りをつたか。次、いかにも縛られました。主、何と鎌を取つてくる、殺さうといひをつたが、何とそちが繩はほどかれぬか。次、されば、どうやら繩がとけさうにござる。とけますぞ。とけますぞ。さあときました。どれどれ、こなたもときませう。さてもさても憎い奴でござる。何としたものでござらう。主、いやいや、この體ではそばへ寄るまい。

ほどに、もとのやうにしてゐて、これへ來たらば捕へて、あいつをゆりにあげう。次、一段とようござらう。主、さあ、これへ寄つて、もとのやうにしてゐよ。次、心得ました。

太、狐めは二匹ながら居るか知らぬ。この鎌で殺してくれう。さあ今うち殺すぞ。主、それや次郎冠者。次、心得ました。主、おのれ憎い奴の。次郎冠者足を持て。次、心得ました。主、さあ、ゆりにあげ。ゆりにあげ。太、「これは何と狐どもするぞ。主、狐とはまだ。おのれめは憎い奴の。縛り居つたがよいか。これがよいか。これがよいか。太、さては頼うだ人、次郎冠者か。ゆるさせられ。まつびら御ゆるされ。まつびら御ゆるされ。二人、どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。

(一)五卷。狂言の筋書を記したものの。狂言記の續編である。

(一)第六十代醍醐天皇。
(二)御名は將順。延長五年(一五八七年)薨去。
管絃の道

(三)第六十二代殿上人

(四)滋賀縣大津市の南、逢坂山にあつた。

雑色

(五)第五十九代宇多天皇。

あながちに好む

九 流泉啄木

今は昔、源博雅の朝臣といふ人ありけり。延喜の御子の兵部卿克明親王と申す人の子なり。萬事に勝れてありける中にも、管絃の道になんいみじかりける。琵琶をも微妙に弾きけり。笛をもえならず吹きけり。この人村上の御時に四位の殿上人にてありけり。その時に逢坂の關に一人の盲庵を造りて住みけり。名をば蟬丸とぞいひける。これは敦實と申しける式部卿の御宮の雑色にてなんありける。その宮は宇多法皇の御子にて、管絃の道にいみじかりける人なり。年頃琵琶を弾き給ひけるを常に聽きて、蟬丸琵琶をなん微妙に弾く。

然る間、この博雅この道をあながちに好みて求めけるに、かの逢坂の關の盲琵琶の上手なる由を聞きて、これを極めて聞かまほし

く思ひけれども、盲の住家ことやうなれば行かずして、人を以て内に蟬丸にいはせけるやうなど思ひかけぬ所には住むぞ。京に來ても住めかし。と盲これを聞きて、その答をばせずしていはく、

よの中はとてもかくても過してん

宮もわら屋もはてしなれば



と使歸りてこの由を語りければ、博雅これの由を聞きて、愈々のみやびの心に感じ、思ふやう、我あながちにこの道を好むによりて、この盲に會はんと思ふ心深し。されどこの盲

の命いつまであらんも測り難し。我が命も知り難し。琵琶に流泉啄木といふ曲あり。これは世に絶えぬべきことなり。たゞこの盲のみ

かまへて

うは曇る

心をやる

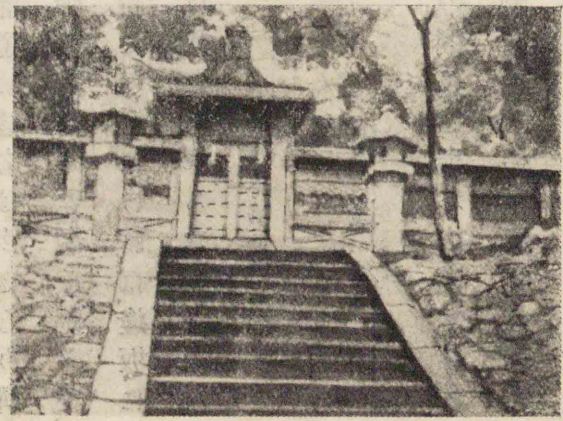
逢坂の關の關は
物しふくりて、
しかりて逢坂の關に也
すゆかしきよ

こそこれを知りたるなれ。かまへてこれが弾くを聞かんと思ひて、
夜かの逢坂の關に行きにけり。されども蟬丸その曲を弾くことな
かりければ、その後三年の間、夜な夜な逢坂の盲が庵の邊に行きて、
その曲を今や弾く今や弾くと密かに立聞きけれども、更に弾かざ
りけるに、三年といふ八月十五日の夜、月少しうは曇りて、風少しう
ち吹きたりけるに、博雅あはれ今宵は興あり。逢坂の盲今夜こそ流
泉、啄木は弾くらめ。と思ひて、逢坂に行きて立聞きけるに、盲琵琶を
かき鳴らして、もの哀に思へる氣色なり。博雅これを極めて嬉しく
思ひて聞くほどに、盲ひとり心をやりて詠じていはく、
逢坂の關のあらしのはげしきに
とて琵琶を鳴らしたるに、博雅これを聞きて、涙を流して、哀と思ふ
こと限りなし。盲獨言にいはく、あはれ興ある夜かな。若し我にあら

すきもの

かたみに

ぬすきものや世にあらん。今夜心えたらん人の來よかし。物語せん。
といふを、博雅聞きて聲を出して、王城
に在る博雅といふものこそこれに來
たれ。といひければ盲のいはく、かく申
すは誰にかおはする。と。博雅のいはく、
「我はしかじかの人なり。あながちにこ
の道を好むによりて、この三年この庵
のあたり來つるに、幸に今宵汝に會
ふ。」と。盲これを聞きて喜ぶ。その時に博
雅も喜びながら庵の内に入りて、かた
みに物語などして、博雅流泉、啄木の手
を聽かん。といふ。盲、故宮はかくなん彈き給ひし。とて、件の手を博雅
に傳へしめてけり。博雅琵琶を具せざりければ、たゞ口傳をもてこ



(山坂逢)社ノ上丸蟬

(一)六十卷。宇治大納言物語ともいふ。源隆國著。和漢語と今この雑話を古た文にて集録し

(二)理學士。東洋音樂學校教授。音樂生十餘名。對音生十餘名。對講。日本音樂の原書等。音樂の著書は多し。執筆者の文は多し。執筆者の

れを習ひて、返す返す喜びて、曉に歸りにけり。
これを思ふにも、もろもろの道はたゞこの如く好むべきなり。それに近代は實に然らず。されば末代には諸道に達者は少きなり。蟬丸卑しきものなりといへども、年頃宮の彈き給へる琵琶を聽きて、極めたる上手にてありけるなり。それが盲になりなければ、逢坂にはゐたるなりけり。それより後、盲の琵琶は世に始れるなりとなん語り傳へたるとや。

(一) 今昔物語に據る

一〇 我が國の音樂

(二) 田邊 尚 雄

いかなる國でも太古から今日までの間には種々多様な音樂が交替して起つたものであるが、我が國ほどその種類變化の多いものは稀である。それ許りでなく外國では古いものは大半消え去つて常に新しいもののみが行はれてゐるが、我が國では二千五百

年前の建國當時から各時代を通して今日に至るところの各種の音樂が大半遺存してゐて、今もなほこれ等が行はれてゐることは、音樂史上驚歎すべきことである。加ふるに古くは東洋、近くは西洋の各文明國から常に新しい樂器や樂曲を輸入してゐて、廣くその材料を世界に求めてゐる。これによつて今日我が國民ほど多種多様な音樂を行つてゐる國は世界に類例がなく、この點は實に世界に誇るに足るところのものである。

我が國上古の樂器としては和琴ワゴキと稱する六絃の琴と、和笛ワフエと呼ぶ六孔の笛との二つを主要なものとするの外には見るべきものはなかつたが、時々刻々折にふれて歌ひ出されたところの歌謠はその數夥しくあつたことは、古事記、日本書紀などの古書に當時の即興歌が極めて多く掲げられてゐるのを見ても判る。然るにこれ等の古謠は大部分絶滅してしまつたことは頗る残念であるが、幸

朝貢

にして神武天皇御東征の際軍中で歌ひ給うたといふ久米歌と、上古の大和國の俚歌から出でた大和歌と、東國地方の民謠であつたといふ東遊との三つが今日まで遺存し、今も宮中の儀式や、神社の祭儀に行はれてゐる。もとよりこれ等はかなり後世に於て修正を加へ、大きな變化をなしたものと思はれるが、然しこれ等によつて幾分なりとも我が上古の音樂の性質を知ることが出来ることは幸である。今これ等の古謠の音樂的性質を見るに、單調なる中に、質美にして且つ雄大なる氣品に富んでゐることは、これを聴く者の齊しく感歎するところである。

○神功皇后新羅を征し給ひ、それより三韓が朝貢するやうになつてから、珍しい朝鮮の樂器や樂曲が輸入されたが、殊に佛教が渡來するに至つて急速に支那や印度の進歩したところの形式的器樂が輸入され、奈良朝から平安朝の初期にかけて我が國の上層社會

朝貢
新羅
百濟
高麗
唐

(一)第五十四代

混凝

の人士は皆相競つてこれを學んだ。それは横笛、笙、箏、篳篥、琵琶、箏、太鼓、鉦鼓、鞀鼓等の樂器を合奏するを主としたもので、これを管絃といふ。また中にはこれ等の樂器を伴奏に用ひて華麗なる舞踊を行ふものもあつた。これを舞樂といふ。當時我が國に於てもこれを模して多くの新作曲をなすに至つた。仁明天皇の時、伶人尾張連濱主が百十三歳の高齡を以て自作の和風長壽樂を舞つた如きはその好例である。これ等の舞樂及び管絃樂曲は大部分今日まで遺存してゐて、今上陛下の御即位式に際しても大饗宴場に於て、太平樂や萬歳樂等を舞はしめ給うたことは國民のよく知るところである。この兩樂は共に唐朝の作曲ではあるが、元來この管絃舞樂なるものは上古より中世に涉り、支那、印度を初め、廣く西域諸國に於ける文化の混一した結果の產物であつて、換言すれば東洋文化の精華の混凝したものであるといつても差支ない。この貴重なる藝術が今

日外國に於て悉く滅亡してしまつたのに、ひとり我が國に於てこれを保存してゐる許りでなくその大部分が今なほ行はれて居り、これを用ひて御即位禮の大饗宴を行はせ給ふことは、實に世界に誇るに足るべきものである。

平安朝の中頃に至り、新形式の管絃に我が國の歌謠を和して、催馬樂、朗詠などいふ新聲樂が起つて來た。これ等の聲樂と前記の管絃舞樂及び古樂とを合はせて今日これを雅樂と總稱し、宮内省樂部を初めとし伊勢神宮、嚴島神社、四天王寺、その他の社寺に於てもこれを行ひ、また民間に於ても稀にこれを嗜むものがある。然し平安朝の末期に現れたところの今樣歌は殆どその正統を失つてしまつたやうである。

源賴朝が幕府を鎌倉に開いてから、政權は武家の手に移つたので、從來宮廷を中心として隆盛を極めてゐたところの雅樂は漸次

天竺の神
曲
市折

(一) 第四十五代聖
武天皇の御代
一三三八年
一四〇八年

(二) 天台第二世の
座主、下野國
の人、眞觀六
年(一五二三
年)歿、年八十。

衰退に傾いて行き、武家を中心とするところの新藝術は未だ起らず、その間には低級なる田樂猿樂の類が彼等に喜ばれてゐた。然るにこの期に於てなほ藝術の權威を保つてゐたのは佛徒であつた。抑、佛教に於ては、^(一)天平八年に波羅門僧正が印度の聲明を傳へたが、これは今に傳はるものが少く、平安朝に至り入唐求法の高僧弘法大師は眞言の聲明を傳へ、^(二)慈覺大師は天台の聲明を傳へ、この兩派は今に至るまで佛教聲樂の正統として行はれてゐる。また古くから盲僧の間には琵琶を用ひて地神經を講ずることが行はれてゐた。これ等の聲明及び盲僧琵琶の流は遂に鎌倉時代に至つて平家琵琶を生むに至つた。これは琵琶を用ひて平家物語を語るものであつて、我が國民音樂の上に新傾向を示すものである。

武家の音樂が向上して藝術的價值をもつやうになつたのは、足利時代であつて、足利義滿將軍の頃に至つて猿樂能は發達して遂

に能樂を生むに至つた。これは一種の歌劇であつて、その音樂たる
謠曲は佛徒の聲明の流を汲むものである。その作法閑雅にして幽
邃なるは、眞に武家の性格に適應するところのものと言ふべきで
ある。

應仁の亂以後は天下麻の如くに亂れ、戰亂相繼いだが、戰爭は民
衆の心を刺戟するところ著しく、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康が相
繼いで天下を一統し、世は漸く太平となるに及んで、民衆の娛樂た
るべき新音樂は忽ちにして大河の決するが如き勢を以て擴まつ
た。文祿年間に琉球から傳來したと稱せられるところの三絃は、改
良に改良を重ねて我が國民的樂器と稱せられるまでになり、その
音樂も唄ひ物としては、小唄、地唄、長唄、端唄等を導き、また語り物と
しては多くの淨瑠璃諸流を起したが、その中でも大阪の義太夫節、
京都の一中節、江戸の河東節、常磐津節、新内節、富本節、清元節等は天

(一) 第七代後陽
成天皇の御代
(二) 二五二年
(三) 二五五年

(一) 第十三代東
山天皇の御代
(二) 三三八年
(三) 生田流の祖
八橋檢校四代
目の傳を受け
た。正徳五年
(二) 二七五年
歿、年六十
(三) 第九代光
格天皇の御代
(二) 四六四年
(四) 山田流の祖
文化十四年
(二) 四七七年
歿、年六十一

下にこれを知らない者がなく、らるに擴まつた。箏樂は足利時代
には僅かに九州北部の一隅に筑紫流として一條の命脈を繋いで
ゐたが、慶長の頃に至り八橋流起つて俗箏の基を開き、元祿年間
には、京都に生田檢校が出て生田流を開き、文化年間には江戸に山田
檢校が出て山田流を開き、かくして箏曲は民衆的のものとなつた。
かくの如く徳川時代になつて我が國民の音樂は實に百花爛漫と
して咲き出でたるの感がある。

明治維新以後泰西の音樂が輸入されて、以て今日に至つてゐる
が、明治十二年に文部省内に音樂取調掛が設置されて、内外音樂の
實情を調査し、ここに我が國民教育の上に音樂科の必要を感じ、唱
歌教育を一般兒童に施すこととなつた。爾來今日に至るまで五十
有餘年の歳月を閲し、我が國民の音樂思想は著しく向上し、最近に
至り新時代の日本音樂は到る所にその芽を萌して來たが、遠から

ずして世界の樂壇に雄飛すべき新日本音樂の出現することは、信じて疑はざるところである。

一一 東大寺

薄田 泣菫

(一) 詩人。大阪毎日新聞記者。名は涼介。岡山縣に生れた。著書に『春菫集』、『茶話』、『魚等』、『隨筆』、『詩集』、『蟲』、『魚等』、『著』、『多』

いつかな

月がよいので東大寺のあたりへ出かける。すくすくと大樹の立ちこめた境内の森には、月の光も流れかねて、陰森の氣が煙のやうに迷うてゐる。このやうな宵に、木立の下路で迷ひでもするものなら、きつと鬼の落した蠱まじものの係わ蹄なにかゝつて、夜一夜歩き廻つたところ、いつかな路標を見つけることも出来なからうと思はれる。南大門は撞木杖をついた翁のやうに、支柱に凭もたれて、その立派な體をじつと空に擡たげてゐる。密迹ひやく、金剛二力士は、この靜かな宵にもその三丈に餘らうといふ體を起して、胸肉むねを張り、寶杵たもとを揮つて、張肘はりひじに控へてゐる。銀の滴のやうな月光が、盗むやうに窓にこぼれて、

寶杵

居丈高



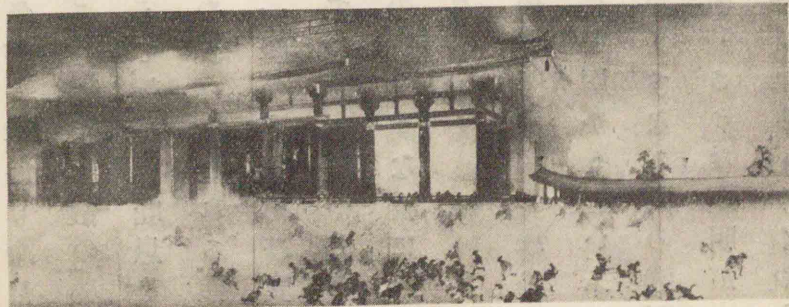
南大門

肩から脹脛むちにかけて、半身に流れる肉しむらの色がいかにも冷たく、また美しい。じつと見てゐると、儼げんしい顔のどこやらに追懷の「夢心地」が漂うて、靜かに吐息をつくかのやうに思はれる。然し、それも一瞬の間で、再び寶杵を揮つて教法を護つてゐる金剛神の居丈高な姿に歸つてしまふ。佛殿の中門は閉されてゐる。百間にも届かうといふ長い廻廊は、鳥の翼のやうに左右に開いて、果は見えずなる。門の透間からかいま見ると、金堂の扉は靜かに閉ぢて、屈託さうな燈明が一つ瞬いてゐる。堂守の僧でもあることか、どこやらにさゝやくやう

(一)永祿十年松永久秀の兵火に罹つた。

(二)奈良縣生駒郡平城村の古名。

な響がして、それもやがて消えてしまふと、あたりはまたもとの靜寂に返る。天人の足音も聞えさうな宵である。このやうな靜かな夜をじつと佛殿の闇に閉籠つて、毘盧舍那佛は何を觀じてゐられるであらう。(一)永祿の昔佛殿が炎上してから後百三十餘年の夏冬を、佛はいつも露宿でいらせられたといふ。その頃は夢のやうな月夜の靜けさに、醉心地になるまでも見とれてゐられたであらう。どことも知らず、十六夜薔薇の匂ふ卯月の宵に、春日野の木立より洩れるながし目のやうな月明に濡れながら、または佐保の川瀬に衣晒す女の唄も眠つた眞夜中、秋篠のあたりに沈み入る月影



(筆仙椽井平) 上炎佛大

法界
閻浮の世

類火
(一)第九十六代後醍醐天皇
卿相雲客

(二)吉野朝の忠臣
藤原藤房
(三)藤原季房
房の弟、藤

を眺めて、ひとり法界の久遠を想ひ、閻浮の世の流轉を觀ぜられた姿は、どれほど美しく、また偉大なものであつたか。今宵それ等の追懷に、しみじみと寂莫の盃を味はうてゐられるかも知れぬ。
あたまの上で鐘が鳴る。九時ださうな。寂びれた舊都の宵はもう夜半過の心持がする。

一二 松の下露

さるほどに類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上をはじめまゐらせて、宮々卿相雲客皆徒跣なる體にて、いづこを指すともなく、足にまかせて落行き給ふ。この人々初め一二町がほどこそ、主上を扶けまゐらせて、前後に御供をも申されたりけれ、雨風烈しく道暗うして、敵の鬨の聲ここかしこに聞えければ、次第に別々になりて、後にはたゞ藤房、季房二人より外は主上の御手を引

十善の天子
田夫野人

(一)大阪府南河内
郡赤坂村。金剛山の北麓。
心ばかりを盡くす

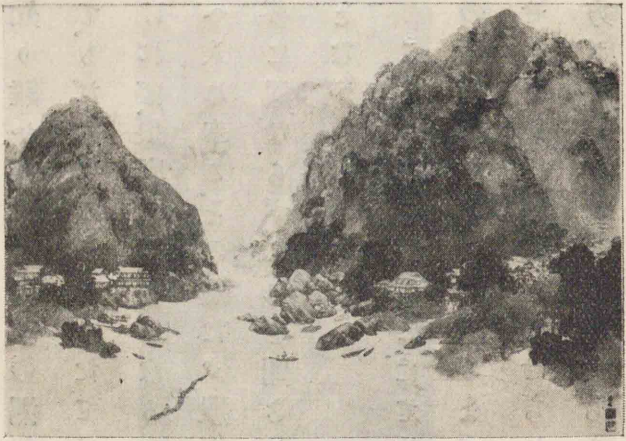
おろそか

羅穀
(二)京都府綾喜郡
多賀村と井出
村との中間

しまゐらする人もなし。忝くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に
變へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける御有様こ
そあさましけれ。いかにもして夜の中に赤坂の城へと御心ばかり
を盡くされけれども、假にもいまだ習はせ給はぬ御歩行なれば、夢
路をたどる御心地して、一足には休み、二歩には立ちどまり、晝は道
の傍なる青塚の陰に御身を隠させ給ひて、寒草のおろそかなるを
御座の褥とし、夜は人も通はぬ野原の露分けまよはせ給ひて、羅穀
の御袖をほしあへず。とかくして夜晝三日に、山城の多賀郷なる有
王山の麓まで落ちさせ給ひてけり。

藤房も、季房も、三日まで口中の食を斷ちければ、足たゆみ、身疲れ
て、今はいかなる目に逢ふとも、逃れぬべき心地せざりければ、せん
方なくて、幽谷の岩を枕にて、君臣、兄弟諸共に、現の夢に臥し給ふ。梢
を拂ふ松の風を、雨の降るかと思し召して、木陰に立寄せ給ひた

(一)同相樂郡。山
城。大和の國
南岸に聳える。



笠置の秋 (庄田鶴友筆)

るに、下露のはらはらと御袖にかゝりけるを、主上御覽せられて、

さして行く笠置の山を
出でしより天が下には

かくれがもなし

藤房卿涙をおさへて、

いかにせん頼むかげとて

立寄ればなほ袖ぬらす

松のしたつゆ

山城の國の住人深須入道、松井藏

人二人は、この邊の案内者なりけれ

ば、山々峰々残る所なく搜しける間、

皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。主上誠に恐しげなる御氣色に
て、汝等心あるものならば、天恩を戴いて私の榮華を期せよ。」と仰せ

もだしけるこ
そなたてけれ

網代

(一)奈良縣山邊郡
朝和村。

(二)殷の湯王が夏
の桀王の爲に
夏臺といふ牢
獄に投ぜられ
たことをいふ。

(三)勾踐。

(四)今の浙江省紹
興縣にある山。

られければ、さしもの深須入道俄に心變じて、あはれこの君を隠し奉りて義兵を擧げばや。」と思ひけれども、あとに續ける松井が所存知り難かりける間、事の漏易くして道の成難からんことをはかつても、もだしけるこそうたてけれ。俄のことにて網代の輿だになかりければ、張輿の怪しげなるに扶け乘せまゐらせて、まづ南都の内山へ入れ奉る。その體たゞ殷湯夏臺に囚はれ、越王會稽に降ぜし昔の夢に異ならず。これを聞きこれを見る人毎に、袖を濡さずといふことなかりけり。

この時ここかしこにて生捕られ給ひける人々都合六十一人、その所從眷屬どもに至るまでは數ふるに違あらず。或は籠輿に召させられ、或は傳馬に乗せられて、白晝に京都へ入り給ひければ、その方ざまかと覺ゆる男女ちまたに立ちならびて、人目をも憚らず泣悲しむ。あさましかりし有様なり。

(一)京都賀茂川の
東。五條と六
條との間。北
條氏が探題を
おいた所。
(二)天台宗に屬し
てある。藤原
道長の山莊で
あつた。
(三)足利高氏と大
佛貞直。
(四)光嚴院。

繼體の君

内侍所



笠置山行宮址

十月二日、六波羅の北方常葉駿河守範貞三千餘騎にて路を警護仕つて、主上を宇治の平等院へ成し奉る。その日、關東の兩大將、京へは入らずして、すぐに宇治へ参り向かひて龍顔に謁し奉り、まづ三種の神器を渡し給はりて、持明院へ参らすべき由を奏聞す。主上、藤房を以て仰せ出されけるは、「三種の神器は古より繼體の君位を天に受けさせ給ふ時、自らこれを授け奉るものなり。四海に威を振ふ逆臣あつて、暫く天下を掌に握るものありと雖も、未だこの三種の重器を自ら擅にして、新帝に渡し奉る例を聞かず。その上、内侍所をば笠置の本堂に棄置き奉りしかば、定めて戦場の灰塵にこそ落ちさせ給ひぬらめ。神璽は山中に迷ひし時木の枝に懸置きしかば、遂にはよも我が國の守とならせ給

それ大神の天雲の
八重かきわけて行く如く、
野の鳥ぞ鳴く東路の
碓氷の山に登りゆき、

日は照らせども影ぞなき
吾が妻はやとこひなきで、
熱き涙をそゝぎてし
尊の夢は跡もなし。

大和の國の高市の
雷山に御幸して、
天雲のへにいほりせる

(一)第十二代景行
天皇の皇子日
本武尊
(二)持統天皇が奈
良縣高市郡雷
村雷丘に行幸
されたまはし
た時柿本
人麿の詠
歌「大君は
しませば
雲のしほ
りせる上
にほりせ
る」(萬葉
集)

(一)「さゝ波や志
賀の都は荒れ
にしなむか
ざくらかな」
(千載集 平忠
度)
(二)平忠度

(三)「高き屋にの
ぼりて見れば
煙たち民の
かまどは今ぞ
富みぬる」
(藤原時平)

御輦の響今いづこ。
目をめぐらせばさゝ波や
志賀の都はあれにしと、
むかしを思ふ歌人の
澄める怨をなにかせん。

春は霞める高臺に
のぼりて見ればけぶり立つ
民のかまどのながめさへ、
消えてあとなき雲に入る。
冬はしぐるゝ九重の

大宮内のともしびや、
 さむきは雪に凍る夜の
 龍のころもは色もなし。
 むかしは遠き船いくさ、
 人の血汐の流るとも、
 今はむなしきわたつみの
 漫々としてきはみなし。
 むかしはひろき關原、
 つるぎに夢をあらそへど、
 今は寂しき草のみど、
 茫々としてはてもなき。

新編 皇朝通志 卷之五十五 國體と萬世一系の信條
 准后北畠親房の書いた神皇正統記の開卷第一に、大日本は神國
 なり。天祖初めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ。我が國のみこの
 事あり。異朝にはその類なし。この故に神國といふなり。とある通り、
 天照大神以來萬世一系の天皇を上戴いてゐる我が大日本帝國
 が、寶祚と國運と天壤無窮であり、そこに國民の榮があることは、我
 が日本に生まれたものの誰も心に思ひ、口にしてゐるところであ
 る。

一四 我が國體と萬世一系の信條

異朝
 天壤無窮

信條

る。けれども、さてどうして我が日本が神の國として今日まで數千年の間傳はり、なほ將來もこの數千年間傳はつて來たいふべからざる一つの力を以て進んで行くかといふことは、建國以來の歴史を味はひ、さうしてここに皇室と國民との關係を知り、それに依つて我が國體が如何に自然に發達して來たかを知らなければ、了解することは出來ないのである。

尤も從來傳はつてゐる日本の太古から上代についての歴史が、その儘すべて正確であるとは素より考へることは出來ない。然しながら、その中に含まれてゐる神話或は傳説の起原、及びその發達して來た途をたどつて見て、その神話傳説が萬世一系なる歴史的事實を基礎として起つてゐるものと考へ得られぬであらうか。また我が日本の上代の神話傳説の中に、この萬世一系といふ信條が活々として在るのは何故であらうか。この意味に於て、我々は從來

環境

の傳説に囚はれたゆき方でなく、寧ろ今日の文化史的研究の上に萬世一系の事實があるか否かを、研究して見なければならぬと思ふ。

相互依存

これについての研究は、まづ人類社會の成立に對して、その環境並びに自然界がどういふ關係であつたかといふことを、地理的にも、生活状態の上からも考へねばならぬ。その關係が我が日本には如何に現れてゐるか。如何に日本の國家が現れ、日本の社會が現れて來たかを觀察して見ねばならぬ。まづ我が日本の如き島國で、しかも平野の少い山國であるのと、支那或は印度の如き大平原國であるのとでは、その社會的集團の進みが異なつてゐる。我が國の如き島國や山國では、まづ限られた地方で社會的集團が起るから、他の民族との接觸がよほど後れる。随つてその社會には生存競争といふことよりも、寧ろ相互に依存する平和な氣分がより多くその

社會に現れたであらうと思はれる。まだ原始的の社會であつて、ただ自分等の目に觸れる範圍が世界の全體であると考へて居つた時代に於ては、若し我々の祖先の起つた所が四方山で圍まれ、或は山若しくは海で圍まれた高天原または日高見國といふものであつたとすれば、その狭い小さな世界で一つの社會的集團を作つてゆくには、よほど平和的であつて、かの強者が弱者を苦しめるやうな意味はなかつたらうと思ふ。その社會を平和的に作り上げることに進んでゆかねば、その社會は滅亡となるのである。このことは社會の一つの細胞ともいふべき家庭の組織についても考へ得ることである。随つて家庭の組織される本となつてゐる夫婦の成婚にも、日本の上代の社會に於ては、近親結婚で社會を作り出してゐたことは、神話傳説の中によく現れてゐる。さういふ風で出來た家庭は、夫婦、親子の關係は極めて親密であつて、随つて平和な愛を以

て結ばれた社會がここに成立つて來たことを信じ得るいろいろな條件が、日本の社會の發達の上に備つてゐる。

さてこの平和な社會のだんだん發達する具合を見ると、一番初には、別に専門的の職業が各家々にあつたものではなかつたらしい。それがだんだん進んで來た時に於て、その社會の成立やその國民生活に必要な精神的や物質的分業が、自然に行はれて來たものであらう。さうしてその家々の名前は、最初は職業の名前を以て家の名稱とすることに進んで行つたものである。中臣とか、齋部とか、或は物部とかいふ名稱は職業の名稱であるが、それで一つの家の名前が出來てゐるのである。この場合に、それがまた國家的組織と一致してゐるのが、即ちまた我が國上古の氏族制度で、特殊な職業がなくて國家の最高地位を占められる家は、たゞ一軒しかないのであるから、別に家の名稱を呼ばぬ。随つてこれを作る必要がない

氏族制度

すめらみこと

く、たゞ尊稱だけを作ればよろしい。今も御上とか、上様とか、陛下とか申し上げれば、天皇陛下の御事であるやうに、大昔から我が皇室には御家名といふものがない。たゞ親王や皇族の御方が別家をなされば、何の宮様と申すのみである。天皇陛下には、すめらみこと、即ち我々を統べてゐられる御方といふやうな意味の尊稱はあるが、それ以上に特別に皇室として御名前を附して、かういふ御家の誰といふ必要はないのである。

主権者

主権者の家に名稱をもつてゐない國は、世界中今日に於てたゞ我が大日本帝國あるのみである。いかなる國でも、日本以外の國では皆主権者の家名がある。これは要するにも、國民の一部であつたものが、後に勢力を得て主権者となつたからである。日本の皇室はこの點に於て、社會發達の最初から主権者として今日まで繼續されたことを事實の上に於て示すもので、實に世界に類例のない

國民的自覺
根本義

萬世一系を、この事實の上に證明してゐるのである。若し日本にいづれの時代にか革命が行はれたものとすれば、現主権者には必ず家の名前がなければならぬはずである。

以上の所説によつて、皇室の天壤無窮なるべき天照大神の神勅の、實に皇室にも國民にも國民的自覺を作るべき根原となつてゐる根本義が了解されるであらう。さうして我々がこの建國の昔に遡つて祖先の偉業を回顧する時に、我々は國民としての信仰に生きる。我々はその信仰を益、養成してゆかねばならぬ。即ち歴代天皇は萬世一系を事實に於て永久に傳へることに御努力あり、我々日本國民はその意味に於て皇室を御助け申すことに於て努力があり、ここに初めて日本民族として進んで來た意義が現れるのである。さうして前に述べた日本の最初に出來た家庭の成立に於ける親子及び夫婦の關係を押擴げたものが、この皇室と國民との關係

(一)第二十五代。
(二)百濟の暴君。

式微
供御

(三)第百五代。

となつたので、一に歴代天皇が、義は君臣であるが親みは父子のやうな大御心で國民に君臨され、随つて神武天皇から今日まで連綿として皇統を傳へられ、御一人の天皇も國民を虐げられた御方がお出でにならぬといふ美しい歴史となつて現れてゐるのである。武烈天皇の御事蹟として日本書紀にあるのには、朝鮮末多王の事蹟が混入してゐることは、早く學者の定説となつてゐる。さうして仁徳天皇が民家の煙を御覽になつての御聖徳も、醍醐天皇が寒夜に御衣を脱がせられた御事も、皆各時代の天皇の御仁慈の御心が、仁徳天皇や醍醐天皇の御聖徳の上に現れてゐるので、仁徳天皇、醍醐天皇のみが聖徳の天皇であらせられたといふのではない。後奈良天皇が皇室の甚だしく衰微して、その日の供御にもお困りになつてゐられたにも係らず、なほ宸筆を染めて般若心經を書寫し給ひ、國民の病苦を救はうとされたことは、この皇室の式微から再び

盛んな皇運の光がさして來た所以である。随つて我々日本臣民は、皇室の爲に身命を捧げて御奉公をするといふ考の上に立つて、始めてこの萬世一系の皇運を扶翼し奉ることが出来るのである。

Motto.

神皇正統記にも「窮りあるべからざるは我が國を傳ふる寶祚なり。仰ぎて尊み奉るべきは日嗣をうけ給ふ皇になんおはします。」といつてあり、また「およそ王土に生まれて忠を致し身を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきはひ争ひ申すべきにはあらぬにや。」と述べてゐるのは、親房が如何によく日本國民の精神の中核に觸れてゐたかを觀るに足るもので、我等國民が服膺すべきモットーであらねばならぬ。我々は、皇室の繁榮は同時に日本國の繁榮であり、日本國の幸福と一致する皇室の繁榮であるといふことでなければ、建國の大精

神と矛盾するものと考へねばならぬ。またそこに始めて天照大神の神勅の意味が強く現れて、日本の國運と民福とが進んでくるのである。即ち我々は外來文化に對して、我が皇室及び國體を中心として、精神的にも物質的にも向上を圖るべきである。皇室及び國體を忘れて、たゞ外來文化に心酔して、國民的自覺を失ふことがあつたら、それと同時に日本民族の滅亡が到來する。我々日本國民は永劫にこの大信條の下に進まねばならぬ。

(一) 黒板勝美の文に據る

自修文

晩秋三信

(二) 永井荷風

つは露の花は、寒き冬の日にのみ咲くものと存じ居り候處、今年はいかなる時候の狂ひにや、菊に先んじて、既に手水鉢のほとり、袖垣の蔭などより、黄色き花を見せ申し候。枇杷の花漸く蕾を持ち、無花果は毎日食べきれぬほど熟れ申し候。先日甲州の人よ

(一) 歴史家。文學博士。明治九年長崎縣に生まれた。歐米や明記の國史や研究等がある。
(二) 小説家。名は莊吉。明治十二年東京市に生れた。地獄の花。ふら笑等の著がある。
 袖垣 竹垣などのやうなものに添へて低くとりつけた垣

(一) 東京市の東南の區域。山の手に對していふ。日本橋神田などの商業地。

り、葡萄に添へて棗の實頂戴致し候が、近頃は八百屋の店にも外國種の果物のみ多くなり候折から、棗の實は何となく昔めきて珍しく存じ候。その味も、甘きが中に溢みを含み、清涼なる香氣いつまでも口中に薫じ候具合、いかさま仙人の食ふ物と存ぜられ申し候。

(十月六日)

どんより曇りて風なく、靜かなる日に御座候。暮れてゆく秋のこの頃には、晴れわたりし小春の日和よりも、却つてこのやうなる薄曇の空望ましく御座候。犬蓼の花さく廢園の池、柳散るお濠の水、または下町の掘割などに立ちて水鏡の景色を眺むるには、このやうなる薄曇の日に限り申し候。折々雲の間より、薄き青空をも見申し候。雨を氣遣ふ恐なく、散歩の道すがらふと思ひ出して、久しく尋ねぬ遠き友を尋ね、思ひがけなく談笑の半日を過すも、このやうなる薄曇の日がよろしく御座候。男の身にさへ、仕立

初夜
戌の刻
後八時
一午

直しの袷の著心地はいかにも身にしみじみといたし候間、女などは、さぞかし若かりし昔の小袖模様など、朝夕の肌寒さにつけて思ひ出づることと存じ申し候。この頃、初夜過ぎて外より歸り候時、表通りの商家いづれも戸を閉て居り候に、横町の仕立屋ばかり灯もあかるく、職人大勢にてせつせと夜なべ仕事いたし居り候さま、いかにも冬近く相成候やう目につき申し候。

(十月九日)

(一) 神奈川県相模川以南の海岸地方をいふ。

昨日は晝夜とも風吹きすさみて、寒さも厳しく御座候處、今日は空青々と晴れわたり、所々の紅葉も一層美しく見え申し候。青空の色の美しさは、東京にては、小春日和の十月よりも、初冬いつしか過ぎて菊も末になり候頃より、十二月になりて愈濃く滴るやうに見え始めるものに御座候。今年は寒氣例年よりも早き故にや、今日の空は全く十二月のやうな心地致し候。暖き湘南の海

邊などに赴き、砂山の上に横たはりて讀書など致すにはよろしき日和と存じ申し候。
(十一月十二日)

一五 御即位禮拜觀

(一) 久米正雄

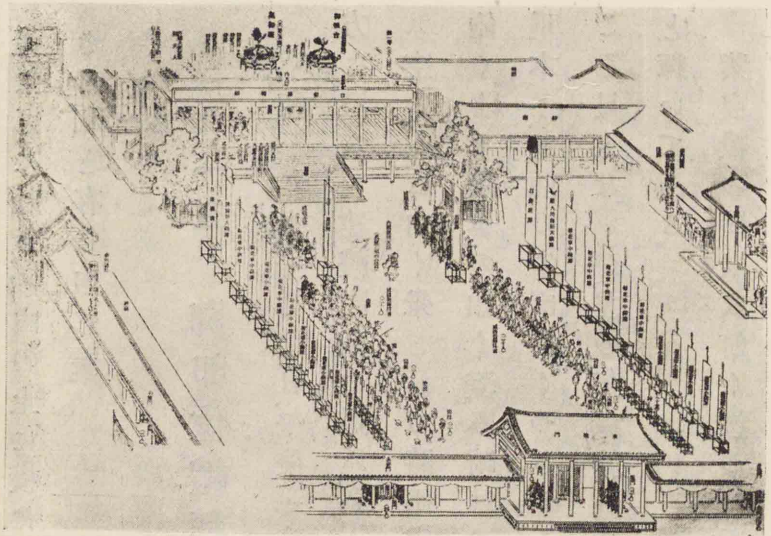
(一) 小説家。明治二十四年長野縣に生まれた。牧場の兄弟。破船の學生。代船主。三浦製絲工場主。天と地と等々の著者。瑞霧

昭和三年十一月十日、午後一時、我等は既に開け放たれて、瑞霧四方に溢る、建禮門前に進み、各、定め的位置についた。

空は、北に白く暈どれる時雨雲を僅かに残してゐるが、その上は飽くまで淺春の如く澄み晴れて、日影は塗色鮮かな承明門の黄の垂木と、丸柱の半ばをくつきりと照し、その彼方には、南庭の白河砂こそ見えないが、左の萬歳旛がやゝある風に翻つて、萬と閃めき、歳と輝いてゐる。

紫宸殿の屋根は、白く塗つた垂木の上庇が少ししか望めないが、帽額から以下は、鮮か過ぎるほど鮮かで、殊に日光が新修の南階一

杯に照満ちて、爽朗の感横溢。



御即位禮紫宸殿御儀解説圖

瞳を凝らして、中央畏れ多くも高御座を、ちつと窺ひまつれば朱塗の勾欄靜かに劃るところ、格子狭間の龍爪かな金を點じて、御座は深く紫暗の御張に閉されて拜されるのみ。
殿上を、式部官でもあるのだらう、瀟洒たる中世騎士にも似た姿が、ちらりちらりと通り過ぎて、何かと準備につくしてゐるさへ、繪のやうだ。
やがて一時半近く、どこやら

に人の氣配が起ると見れば、ちやうど眞先に衛門の諸士が入り來つて各、本位につくところだつた。負うた矢の色、つづいて威儀の人人、黒、緋、^{はなだ}縹各の袍に身を包んで、肅また肅と立ち現れ、承明門前を通過した。愈、御儀は近づいたのだ。

一時四十分、どこともなく振鈴が鳴つた。参列の諸員、参進の合圖であらう。右手控所の方から、先づ大禮服、陸海軍の禮裝嚴めしき人が、胸を張り、ゆつくりゆつくり砂利を踏んで、承明門の左右の口から、庭内へと参入し始める。暫くは金装の連りである。

この頃から、風や、空をわたること急に、雲は見る見る擴がり、日影忽ち薄れて、やがて第二段の参列者たちが入り來つた頃からは、一粒二粒、時雨が降り出した。それも代議士たちと覺しく、燕尾服の姿が、つづいて参入し始めた頃からは、我等のシルクハットを滴り落つるほどになつて、ひそかに天の無情を歎じられたが、それも、暫く

(Silk-hat.)

儀仗

にして歇んで、寧ろ、誠の淨めの雨、天こそ實に心あつて、さつと一と降り下し祓はれたのであらう。

雨はやみ、再び日は照りわたると、やがて二時。

突然、今度は、氣を付け、の令が門外儀仗の兵列に響いた。と、殿上を右手より、大禮服更に燦たる高位の人々が、時々、袴袴の夫人を交へて、靜かに左方へ通り過ぎ、北側の殿上へ居並び始めた。夫人の袴はいづれも緋色だけれど、袴は萌葱、緋、紫、また緋の上に黒といふ如く、模様も各、變つて、色とりどりに美しい。そしてその中に、どなたかは知らぬが、薄とき色に白い毛襟をつけた洋装の方が交つてゐるのが、一際目立つて見えた。

それが終ると、今度は外國の使臣が、式部官に導かれて、左手より現れた。禮装しるき夫人を伴うて各、本位につき、參入の列はちよつと途絶えた。

(一)時の内閣總理大臣田中義一。

靜謐

警蹕

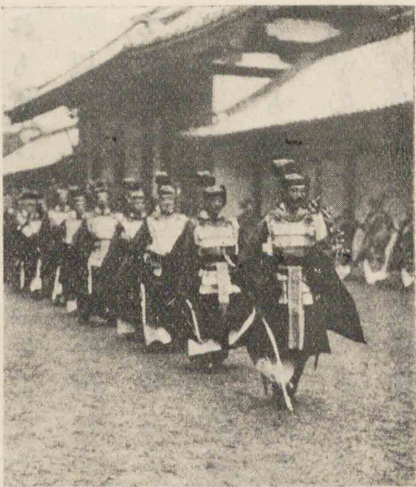
と、やがて間を置いて、黒袍嚴たる一偉軀の人が、同じく左手より、佩いたる太刀にそりを打たせて、威儀堂々入り來つた。首相とは、遠目ながらそれと知られる。つづくは宮内大臣以下であらう。いづれも、さすがに從容としてゐる。

以上の諸員、悉く本位について、殿上、殿下、しばし肅たる人影に満ちると、やがて何かたゞならぬ靜謐が、天地を領した。門外の我等には聞えぬが、警蹕のかゝつてゐる氣勢が、人々の姿態によつて、遠き私にも感じられる。と、密かに仰ぎまつる御座の上、ほのかに御帳の揺ぐのは……。

つと、南階の上、北端欄干の際に、立ちたる式部官の右手が、横ざまに動いて一振。合圖よしと見るや、庭上の鉦と鼓は相應じて、鳴り響いた。

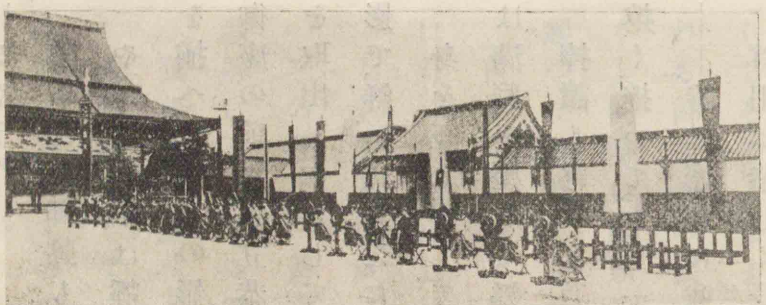
最敬禮！……終つて、畏れながら更に瞳を凝らしまつれば、今ま

で、紫濃しとのみ見奉りし奥、ほのかに樺色とも申すべき御氣配あるは、あれこそ黄櫨染なる御裾か、御袍の袖か。
折から陽光は、帽額直下黄簾の上まで、すべてを輝かに照燦かして、奥の神色、益、幽かに、我等は仰ぎてたゞ、凡々ならぬ氣配——在すと在さぬとでは、正しくはつきり異ふ氣配を、眼底深く感じ得たのみである。



威儀の本位につく人々

しかも御帳臺の方は我には太しき柱に遮られて、めでたかるべき國母の御姿、氣配だにをろがみ申す術なきを。
首相はやがて御前を退りて、しづしづと殿縁を過り、西階の方へ向かつた。愈、御儀は始つたのだ。そして暫くすると、今度は庭上を、萬



紫宸殿 分一分……殿上、殿下、門内、門外ともに全く聲を含みて待ち奉る。
儀 突如、朗かなる御高き聲は、御簾を隔つるのも思はず、二つの門を透つて、我等が賤耳にも響いた。御勅語だ！さるにても我等が新帝の、御聲の若き力に満ち、朗かな張りに満ちて、幅廣く洩れ給ふことよ。お、誠に全地軸を揺りて、九天に響き透る神ながらの御音聲、頭を垂れて、拜受する首相の冠は、御聲の儘に暫し揺

れるやうだ。

陛下には御聲も爽かに勅語を終らせられた。やがて首相は靜かに迫らず南階の西隅を階一階一階毎に兩足を揃へて、塗沓の影黒く登る。さては壽詞の奏上だ。今、首相は更に高御座の前に謹立、恭しく拜し奉つて、左に身を向けながら、懷の壽詞を取出した。そしてはらはらと開くのが、折から眞直にさし入る日影で、鮮かに見えた。

鈴々

身を正しうして、首相はやをら捧讀し始めた。鏗を含んだその聲は滿庭を壓して鈴々、遠き我等にさへはつきり響いてくる。捧讀し終つた首相は、壽詞をまた左手横に身をかしげて、恭しく捲く。捲いて、もう一度何故かはらりと開き、更にまた捲收めて退る。時に、密かに我が腕時計を見れば、三時に迫る、あと一二分。首相は恭しく長拜、靜々と階をおりるべく、身を轉じて歩んだ。そ

して、その一步まづ、南階の最上段にかゝつたと思つた時、奉祝に焦れる御所外の民草は、赤心遂に堪兼ねたるか、遙かに一發の禮砲轟くと同時に、御所の彼方を取巻くと覺しき萬民の聲、とゞろに湧き起つた萬歳！また萬歳！汽笛、鐘聲續き響いて、殷また轟……………

首相は、その中を動ぜず從容と南階十八を下つて、また正面御前に進み出た。そして定位置につくと見るや、天にも響けと呼び奉る。天皇陛下萬歳。

その聲、正に蒼穹に響くの概あつて、殿上、庭上、門内の萬臣、門外の我等に至るまで、悉く共に聲を併せて唱和し得た。

萬歳！萬歳！萬歳！と三度。

天日燦として、中天にその唱和を反響し、風靜かにして萬歳旛さへ今は動かず、びつとその歡呼に傾聽するかのやう。

遠く、近く、いまだ鳴り止まぬ汽笛、鐘、聲々。銜は銜を、京洛の山々に

呼んで、我等はたゞこの唱和の渦巻の中心に、何か感極まつて、目頭の熱くなるのを覺えた。

首相は、萬歳三唱の後、またおもむろに座に復した。

つゞいて忽ち起る、捧げ銃の令！建禮門外、左右に各控へたる陸海軍軍樂隊は、この時とタクトを揃へて、唳朗たる、君が代を奏し出した。節の終りを打つ鼓も、今日は心なしか、常よりも高らかにとゞろと鳴る。

唳朗

諸員最敬禮。

軍樂隊の奏樂餘韻を残して終ると、今度は更に喇叭のみの「君が代」高く單音を、四周に吹きわたらして、長く曳く。

頭を上ぐれば、既に昇御濟みし高御座は、紫雲深く閉されて、ここに御儀は、誠に大きく朗かに、終りを告げたのを知つた。誠に大きくも且つ朗かに。

一六 冬の山里

和泉式部

さびしさに煙をだにも絶えじとて

柴をりくぶる冬のやま里



太田垣蓮月蹟

冬畑の大根の莖にしもさえて

あさとでさむし岡ざきの里

太田垣蓮月

よみ人しらす

神無月ふりみふらすみ定めなき

しぐれぞ冬のはじめなりける

(一)平安時代の歌人。越前守大江雅致の女。

山さとはまのきつなれのみ
かきふかぬ
かさはひし
日はさひし
かりけり
蓮月

(二)女流歌人。京都に住んだ。明治八年歿。年八十三。

(三)京都市洛東岡崎。

(一)江戸時代の歌人。因幡の人。天保十四年(一八四三年)五月二十日歿。年七十六。

てる月の影の散りくるこゝちして
よる行く袖にたまる雪かな

(一) 香川景樹

月前郭公
さやかなる月の光にぬもねられぬを山ほとけきす鳴夜なりけり 景樹

月夜
わが心は月夜半に
山ほとけきす鳴夜なりけり

香川景樹筆蹟

(二)平安時代の歌人。延喜二十一年(一〇四九年)壹岐守に任ぜられた。

きのふといひけふと暮して飛鳥川

(二) 春道列樹

ながれて早き月日なりけり

(三) 清原深養父

冬ながら空より花の散りくるは

雲のあなたは春にやあるらむ

(三)歌人の人。延喜頃

一七 葛温泉より

(一) 大町桂月

(一)文學者。名は芳衛。高知縣の四人。大正十四年(一九二五年)四月十七日歿。年五十七。黄菊白菊。花紅葉。史。日本文章學生訓等の著者がある。
(二)青森縣上北郡法奥澤村にある。
(三)大正十二年。

謹んで新年を奉賀候。
昨年十月半ばより葛温泉にまゐり杉浦重剛先生傳を草し、十二月三十一日にて終へ申し候。閣下の御談話の筆記この書に一大光彩を放ち申し候難有奉存候。

「山は富士湖水は十和田」と私は常に申し居候葛温泉は十和田の山中にて有之候へ共、湖水よりは四五里も離れ居候。東北本線の古間木驛より三本木町まで四里輕便鐵道有之、それより焼山と申す五六戸の小部落まで六里夏は自動車通じ申し候。焼山は葛川の奥入瀬川に合する所、焼山より奥入瀬川を溯ると三里半にして十和田湖に達し申し候。この三里半の風致溪流としては天下無類に候。十和田湖にては御倉、中山の兩半島の斷岸絶



壁奇巖怪石老樹古木が天下無類に候。自動車は湖畔までも通じ申し候。

燒山より葛川を溯ること半里、山坂を登ること半里にして葛温泉に達し申し候。山中の一軒家に候が、風呂場は三つもありて一は湯瀧に有之、一は狹長にして湯槽深く、一は廣大にして淺く、立てば湯が腰に及ぶだけに候が、湯槽の大きさおよそ三間四方にも及び三方空地にて硝子窓なれば浴しながら月を賞することを得申し候。

土地は清淨、人は純朴、殊に今や積雪三尺も有之、四月の末までは

去年今夜
先生を哭し
今年今夜
先生を祭る
同じく是山
中風雪の夜
泣いて遺編
を繕いて先
生に謁す。

杉浦先生
一周忌茶賦

清淨

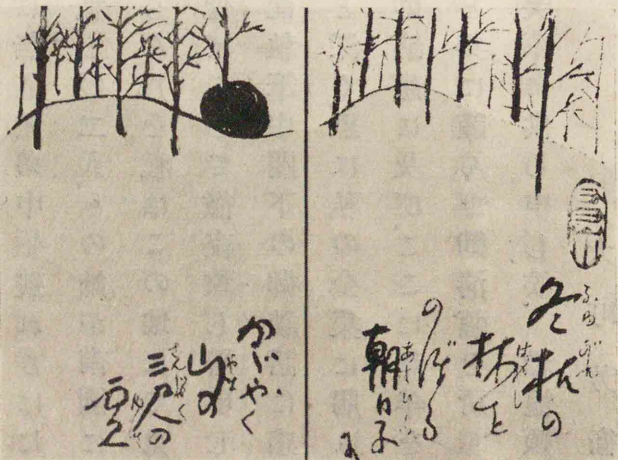
泣き續く遺編
先生
杉浦先生一周忌
茶賦

一のそ 蹟 筆 月 桂

冬枯の林を
のほる朝日
子にかゞや
く山の三尺
の雪。

解け不申候。積雪の爲に往來絶えて心がのんびり致し候。宿の若者數日の間に一度雪を衝いて燒山へまゐりて郵便物を出し、また受取り來り申し候。燒山までは日々郵便集配人まゐり申し候。私は引續き籠城していろいろ著述に従事雪解くる頃飛出して山登りを致し可申候。

葛温泉附近は山毛櫨の原生林にて小湖五つ六つ有之、雪なき時は逍遙して氣持よき所に候。ぼんどりとて猫が羽織着たるやうな怪物捕れ申し候。「まみ」も捕れ申し候。何れも頗る美味に候。今夜は舊の十一月二十七日に候。故郷の姉より手



二のそ 蹟 筆 月 桂

紙にて「今夜は月の出に阿彌陀様がお現れになるから拜め」と申し
來り候。姉は佛教信者にてそれを信じ居候。私は信じ不申候へ共親

ばんどりを
ばんがたと
りてこんば
んのばんし
やくうれし
よくばんも
がな。



ばんどりを
ばんがたと
りてこんば
んのばんし
やくうれし
よくばんも
がな。

は既に無之兄弟中生残れるはたゞ
桂 姉と私の二人、その姉が南國にて
月 見るらん月を私はこの地にて見て
筆 姉を偲ばんとて徹夜致し居申し候。
蹟 傳記執筆中閣下の御談話に感ず
の すること深く、思は私の全集に賜はり
三 たる御感想に及び、ここに新年を賀
すると共に、謹んで御清福を祈り下

らぬことども申し上げて新年の御笑草に供し申し候。 恐惶頓首

甲子正月三日

大町芳衛

小笠原閣下 侍史

一八 富士の冬

榎 有 恒

(一)慶應義塾大學
出身。現下第
一流の登山家
で、またスキ
1家。その登
高記を集め編
した著書に山
行がある。
石室

七つ道具

二月の或夜私等は富士の五合目の石室に宿つた。
何の爲にと聞かれても答へやうのない山の誘惑に引きつけら
れて、住居を背負つたくらゐの満足で着物も食物もそしてその上
に縄やかんじき等の七つ道具までリュックサックに詰込んだもの
だ。その中から取出して、これに寝れば寒さがかんかん音して跳返
つてしまふなんかと、うぬぼれて潜り込んだ寝袋だ。が實は薄つべ
らなもので皆簀蟲然と轉がつてゐる。石室の外には吹雪が激しか
つた。山腹に狂亂する冬が、私等の僅かばかりの命や火を見つけ出
して、一撃のもとに粉碎しようとする。鬨聲をあげて小屋に衝きたつて
くる。その度ごとに細かい雪がどこからともなく吹込んで簀蟲ど
もは眞白だ。誰かが零下二十二度だよといふ。あゝ、寒いわけだとも

んな承知をする。思へば二日前には事務所の机に向かつてゐたんだが、それも遠い十数年の生活のやうに消えて、今は蠟燭の光に照



らし出された
この小さな世
界だけだ。鮮か
のに浮き出たこ
富の雰圍氣が山
士友だちといふ
のであらう。誰
かは歌つてゐ

る。一人は蠟燭の焰を見つめてゐる。焚火の勢が衰へてゆくやうに
私は朧な眠に落ちた。

年の若い仲間——山では年の若い者ほど先に立つて働くとい

丹念

ふ規律があるのであるが、朝の二時半頃には跳起きてまづ靴を穿
き丹念にゲートルを巻きつけた。身拵をすまして焚火を盛んに燃
やしてゐるその音に、一人二人と眼が醒めて天氣はどうだと聞く。
四時半石室の外へ小さな口から這出る。外は沈痛なほど靜かに空
も山も凍りついてゐる。昨夕吹荒んだ吹雪が何もかも敲き固めて
しまつて、空氣までも水晶のやうに硬く冷たい。見上げると長大な
斜面が星の世界にまで突込んでゐる。頂から一走りに下るその蒼
白な斜面が下に行つて幾條かに岐れてゐる。その端の雪の消えた
あたりから暗褐色の緩いうねりが擴がり出して、廣大な裾野を形
造つてゐる。裾野の闇の中には彼方此方に掃集められたやうな電
燈の光が群がつてゐる。かじかんで蹲つてゐる村や町なのであら
う。

私は各に定められた順に従つて同じやうな調律と間隔とを持

(一)山中湖、富士五湖の一。

して一列になつて登り出した。繩を背負つてゐる者もある。魔法瓶の大きなのがリュックサックから頭を出してゐるものもある。厚い防寒具に顔まで包んだ人影が幾箇かのラムフに足元を索しながら悠然と登つて行く。やがて足元の雪に明るさがさしたかと思ふと、東にたなびいた大陸のやうな雲の上が朗かに明出した。見る間に重い夜が消散して早い光が頂を染めた。そして伊豆の海も、山中の湖水も、軽やかに光り出した。私は今雲端を上つたばかりの目ばゆい太陽に向かひ、瞑目して腹一杯に息を吸つた。光だ、そしてこの廣大にして清冽な空氣だ。オロマニアに罹つた、患者たちは初めてここに魂が落着くのを感ずるであらう。

六合目八合目の雪に埋もれた小屋を経て九合目に達した。手に取るやうに近い頂上の一端から雪煙が昇つてゐる。強い風が私等にも襲ひかかつて來た。突嗟にピッケルを強く打込み身體を伏して

かんじき

模糊

(一)富士五湖の雪

どつと當る力に耐える。數歩を進める。また風がくる。それに雪面の凍結がかんじきの齒を跳返すほどに硬い。ピッケルを振り出した。一足ごとに足場を切つて行く。遅々として進むのだが激しい勞動だ。息が切れる。汗がにじみ出る。一列に繩で結び合つた誰もが同じやうに一步を吊つては次ぎの一步を構へる。懸命な重い步調だ。かうして登つてゐる時は辛苦な時だ。だがその辛苦の中から何かしら解放されてゆくやうな爽かさが湧いてくる。自分たちの小さな立場を守りながら渾身の力に働いてゐるのだ。堅く信じてそして生きてゐる時なのだ。模糊の中に求めてゐるものが、現實になつてくるやうだ。

頂上に着いたのは九時頃であつた。どの石室も吹溜りの雪に半ば埋められて、全容を現してゐるものは一つもない。たゞその前の鳥居だけが一つの雪の上に立つて風を受けてゐる。

(一)富士八峰の中
の最高峰。高
さ三七八〇メ
ートル。

巨大な火口を廻る劔ヶ峰を初めとした外輪山も、或はまた火口壁も堅く凍結して荒寥たる眺望である。不穩な黒雲が一團また一團と大日あたりから吐出されて、高い空を渦巻いて驅つてゆく。風は益強さを加へ天氣の變調の兆が明瞭になつて來た。幾分間か極めて短かい時を憩つて、私等は直ちに下山の途についた。再び身體を一本の繩に繋ぎ合つて——登りにも繋ぎ合つたが、これは急傾斜面を上下する際に萬一足を滑らして轉倒するやうなことがあれば引止める爲である。鳥居をぬけて一目天上界より下界にまで續く雪の斜面を一直線に下り出した。友の步調が頗る早い、喜に躍つてゐるやうだ。自由なしかも確實な力の入つた足が雪を蹴り氷を碎いて驅けるやうに下る。頂上に眺めた天氣模様は私等の速度よりは遙かに早く覆ひかぶさつて來た。

小さな龍卷をそちこちに卷起しながら激しい吹雪が寄せる。再

び五合の石室に辿り着いたのは十時頃であつた。火を燃し湯を沸かしなどして初めて寛いだ氣持になつて食物も十分にとつた。思ひ出話や常談の笑ひさゞめきの中に、繩を捲直してゐる者もあれば、パイフを長閑に燻らしてゐる者もある。一通り休憩を得て、寢袋やその他重々しい防寒具などは皆リニックスに詰めこんで小屋の始末をした。

冬の登山の特色の一つは荷の重いことだ。登りにも下りにもたしいした相違のない重い荷を背負つて歩かなければならない。五合の石室を後にして私たちはヒッケルを小脇に抱へてしまつて歩いてゐる様はすつかり調子を落した戦後の氣分であつた。また自然そのものも三合目あたりを境界として冬の嚴しさが急に薄らいでしまふ。二合五勺のあたりであつたらうか雪中登山と印刷したお札が數枚雪の中から現れてゐた。やがて氷と雪とのみの境涯か

ら、静かな森林の中を一筋に下つた。冬枯の林には鳥の聲一つ聞かず、時をり梢に風が鳴るばかりであつた。

山頂には今も四大が纏れ合つて荒んでゐるであらうが、林の中には幾千萬と數限り知れない生命がしめやかに春を待つてゐるのだ。沈思して長い冬を忍んでゐるその中を、私等の一行がたとひ空気を亂したとて、それも暫時でまた深い静寂があまねくわたつて人つ子一人通らない。

須走の宿に午後二時頃歸着した。村の街道には豪勢な日が――然し勢のさめた冷やかな日が、鋭い光を撒散らしてゐた。

一たい富士ほど古より感興を興へた山が他にあらうか。譬へにもいふ、富士の山ほどに、この山に關して詩歌文章繪畫は充ちてゐる。尤も今のあわただしい生活が、江戸人ほどに味はふ餘裕を興へないにしても、どこか心の隅に潜んでゐることには優るとも劣る

(一)常陸風土記に載つてゐる。

こととはあるまい。その潜在する姿がをりに觸れては蘇つてくる。古人が、^(一)福慈、岳常雪、不得登臨、^{スルテ}といつたが、そんな恐怖は消滅してしまひ、それでもその感想に相通ずる一脈の氣高い力が私等にも働きかける。

冬の登山を思ひついたのも、たまたまロンドンに居つた時、仲間から富士はいい山だぞ歸つたら登らうと勧められて、新しくその姿が蘇つて來たのであつた。それまでは恰も室の隅に置去りにした飾物同然であつた富士を引寄せて大切に眺め出した。するとその優雅な斜面の作る線が手をとつて静かに導いてくれる。自ら牽かれるともなく牽かれて千尺また千尺と登つて行く。六七合目あたりからいさゝか急激に牽かれて頂上に至ると、ふつつり切れて大空へ投出される。どこへ連れて行くといふのか、虚空に行手を失つた魂は元に歸つてまた裾野から登り始める。幾度繰返しても突

孤高

(一) Matterhorn

懊惱

(二) 萬葉集卷三に出てる。

詰められぬ線だ。そしてたゞ一筋に何の跳躍もなく簡素な曲線を描いて上つてゐる。どこを見ても誇張がないが、壓するやうな力で魂に食込んでくる。ちやうど優れた佛像に浮かぶやうな不思議な沈黙の力だ。屈托のない廣大な裾野を引いて、孤高を持してゐる姿は飽くまで己の境涯に悦樂してゐるやうだ。

(一) マッターホルンが手強い闘を挑みかけるやうな意欲が見えない。全く八面玲瓏として大空高く聳えてゐる。

今更ながらに眺め入つてゐると、限りない憧憬に驅られて懊惱する。幾百年の間人の魂を捕へた方だ。

(二) 「わたる日の影も隠るひ照る月の光も見えず白雲もい行きはかり時じくぞ雪は降りける」と歌はれた富士は、遼遠の昔にも、そしてまた今も人々に最も近く生きてゐる山である。

一九 春の樂み

(一) 貝原益軒

(一) 徳川時代の儒者、博物學者、福岡の人。正徳四年(一七三四年)歿。年七十五。大和本草、慎思錄、大和俗訓、樂訓等の著がある。

心づから

つとめて

賓客

四つの始

けざやか

あらはなり

はだれ

(二) 「初春の初子のけふの玉ははき、手にとるからにゆらぐ玉の緒」萬葉集、大伴家持

春はまづ一夜のほどに、あらたまの年立返るあしたの空の光、心づからにや、古年に變りてのどけし。睦月はことだつとて、貧しき家にも春盤などいふものを設く。また土器取出で、大御酒進めて、まづつとめて父母にことぶきし、次に自ら祝し、賓客にももてなすさまなど常に變りて、いとなんいみじうめづらかなる。時は今四つの始なれば、空の氣色やうやうひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山邊に霞の薄くたなびける、さまざまに物けざやかに見えて、冬の空に立變れる装、まづ春の來れるしるしあらはなり。垣根隠れに冬より残れる雪の、所々はだれに見ゆるも、去年の名残を惜しむべし。待ちわびし梅の匂、百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出で高きに遷る鶯の、春を迎へてももの若き聲、初春の初音のけふに

(一)「花ならで身にしむものは驚の、かならなりけり。」
(風雅集) 道因法師
 なづさふ
 (二)韓愈のこと。唐の文豪。字は退之。長慶四年(西暦八二四年)歿。年五十七。

(三)清少納言。
 (四)「日の光敷しわかれふいその上、花も咲けり。」
(古今集) 布留今道
 日永くして少年の如し

逢へる、耳とまりてこひしく花ならで身にしむものならし。花を愛で鳥を羨むは、これまづ春の賜なり。これを始として、なほゆくさき遙かに榮ゆる春の豊かなる惠たのもし。千年を経べき緑の松も、今一入の色を増して、常に見馴れしも、いや珍しくなづさはれぬ。韓文公が「最是一年春好處」といへりしは、早春の氣色、一年のうちにて殊にめづらかに勝れたる故なるべし。
 如月のほどより、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたる装、殊に曙の景色譬ふべきものなくあはれむべし。古の人「春は曙」といひけんも宜なるかな。日の光敷しわかねば、數ならぬ垣根の内も冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人の業も古年より暇ありていそがはしからず。日永くして少年の如く、心靜かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗

老いみいはけみ

(一)周代の哲學者 莊子。孟子と同時代。
 (二)唐の詩人杜甫と同じく唐の詩人杜牧と對して老杜と稱せられる。大曆七年(西暦七七一)年。西暦七五十九年。歿。けぢめ

消えがて

かに霞みわたりたる景色いと遙けし。夕づけて日はすでに入りぬれど、残れる日影なほ久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は陽氣の昇るけにや、わらはべども紙鳶といふものを造り、長き絲つけ、風に任せて放てば、高くあがり、雲の上まで遙けくたなびくを戯とすれば、老いみいはけみ、空を仰ぎ見るもをかし。野にはまた絲遊といふもの、霞の如く地より立騰れり。またかげろふともいふ。莊周はこれを野馬といふ。老杜が詩に「落花遊絲白日靜」といへるもこれならし。これ皆常にはなきものなるが、春めきていと珍し。また垣根の草早く萌出づるを見るにつけても、春の氣は下よりのぼるけぢめ、いと明らけし。花もやうやう咲續きて、梅花すでにうつろひて後、新たなるは、我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるは、たなびく雲の面影に立つ心地す。李白きは、消えがての雪の梢に残れるかと思えていと麗し。

けおさる

櫻の綻び出でたるこそ、花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも、第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花は皆けおされぬ。されど日頃待たせ待たせてやうやう咲けるが、飽くまで見るほどもなく、疾く

(一)續古今集、藤原爲家の詠。



貝原益軒

散るはまた恨めし、
よしさらば散るまでは見じ山櫻
花のさかりを面かげにして
と古の人の詠みけんも、後の思ひ出にせん
とにや、情深し。このをりから、春雨のしきし

うしろめたし

き降れば、我が宿の園の櫻はいかにあるらんと、うしろめたし。柳翠に、花紅にして、春の色を描き出せるは、いと麗しき眺なり。

春やうやく深くなれば、風やはらかに、日暖かに、百草芳を争ひ、群花艶を競ふをりなれば、いづれの所か春のなからんや。かゝる景色

思ふどち

に觸れては、人の心も浮立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋ねてあぐがれありき、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しきことのあるが中なるその一つなるべし。我が心の樂みを知らざる人は、無頼の少年の閑を偷みて、そゞろに行樂するに似たりと思ふべし。芳草雨後に秀で、好花風裏に空しきもこのをりなり。杜甫が詩に、鶯の歌暖かにして正にし

(二)幼子を憶ふの詩句。

(三)宋の人。名は博。希夷は號。太祖に仕へた。

(三)宋の人休希逸の詩句。

げしといひ、陳希夷が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆この時なり。花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月に酔ひて、二つながら兼ねたる樂み、春宵一刻値千金。花有清香月有陰。といふ詩を思ひ出でられぬ。また惜花朝起早。愛月夜眠遲。といへり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人の、あたら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。また夜の間の風のうしろめたきをも知らず、朝起くることおそきは、花を惜しまざるなり。この

(一)宋の人周頌の詩句
 (二)白居易の詩句
 (三)支那南北朝時代の詩人謝靈運が夢中に得たといふ詩句
 (四)京都府綴喜郡山吹の名所
 (五)「巨勢山のつらつら椿つらつらに見れどもあかず巨勢の春野を」(萬葉集、坂門人足)
 いどましく

九十の春光

頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、目立つべき見物なり。されば(一)春風入^ル焼痕^ニといひ、また(二)野火焼不盡^キ。春風吹又生^ズといへるも、焼野の草を詠ぜしなり。古詩に(三)池塘春草生^ズといへりしは、この頃の眼前の景色をたゞありのまゝにいへるなるべし。
 彌生も半ばなる頃、八重山吹の風に翻るは、(四)井手のわたりも見る心地して賑はしければめかれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、たゞ山茶^{ツバキ}のみ異花にかはりて盛久し。殊更つらをなして植ゑたる(五)つらつら椿^{ツツジ}つらつらに見れども飽かず。階のもとの薔薇^{バラ}も夏を待ち顔なり。
 すべて春は草木の花先立ちおくれて、いやをちにいどましく、遅く疾く咲きつゞき、醗^{カビ}醗^{カビ}に至りて花のこと終りぬるは、名残惜しと見ゆ。春の花はいづれとなく咲出づる色、毎に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるはうらめし。九十の春光はいと長けれど、何くれ

(一)「惜しめども春の限りのけふの日の夕暮にさへなり」にけるかな(後撰集、よみ人しらす)
 (二)宋の文豪蘇軾。號は東坡。子瞻はその字。
 (三)源九郎判官義經。
 (四)西暦一〇一一年。没。年六十六。

尋常に飾る

とまぎらはしく、風雨もまたしげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とゞめあへぬ春の限りのけふの夕暮にさへなりぬ。落花寂寂たる黄昏の時は、春の名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」といへる宜なるかな。我がともがら、うき世のちりも、我が心のきたなきも、花見るほどは忘れしに、今より後は如何せん。かゝる折にふれては、殊更時の早く過ぎて、失ひやすきこと、思ひ知られぬ。
 二〇 扇の的
 尋常に飾る

柳の五つぎぬ
舟のせがい

に飾つたる小舟一艘、汀へ向かつて漕寄せ、渚より七八段許りにもなりしかば、舟を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、舟の中より年のよはひ十八九許りなる女房の、柳の五つぎぬに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、舟のせがいに挟み立て、陸に向かつてぞ招きける。

矢面
てだれ

判官、後藤兵衛實基を召して、「あれはいかに。」と宣へば、射よとこそ候ふらめ。但し大將軍の矢おもてに進んで、けいせいを御覽ぜられんところを、てだれに狙うて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。」と問ひ給へば、てだれども多う候ふなかに、下野の國の住人那須の太郎資高が子に、與市宗高こそ小兵に候へども、手はきいて候。」と申す。判官、證據があるか。」さん候。かけ鳥などをあらそうて、三つに二つは必ず射落し候。」と申しければ、判官

小兵

いろふ
きりふの矢

「さらば與市呼べ。」とて召されけり。

與市その頃は、未だ二十許りの男なり。褐くろに赤地の錦をもつて、おほくび、はたそでいろへたる直垂にも、よぎ緘の鎧着て、あしじろの太刀を佩き、二十四さいたるきりふの矢負ひ、うすきりふに鷹の羽わり合はせて、はいだりけるぬだめの鏑をぞさし添へたる。重籐の弓脇に挟み、冑をば脱いで高紐にかけ、判官の御前に畏まる。判官、「いかに與市。あの扇の眞中射て、かたきに見物せさせよかし。」と宣へば、與市「仕るとも存じ候はず。これを射損ずるものならば、永き身方の御弓矢のきずにて候ふべし。一定仕らうずる仁に、仰せつけらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官大きに怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向かはんずるものどもは、皆義經が下知を背くべからず。それに少しも仔細を存ぜん人々は、これより疾う疾う鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與市重ねて辭せば、悪しかりなんとや思ひけ

一定

仔細を存す

御説

一

きりふの次

ひふ

(壽永三年西の刻)



一のそ (筆三月形尾) 高宗市與

ん、さ候はば外れんをば存じ候はず。御説にて候へば、仕つてこそ見候はめ。とて、御前を罷り立ち、黒き馬の太う遅しきに、まろほやすつたる金覆輪の鞍おいて乗つたりけるが、弓取りなほし、手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。
身方の兵ども、與市が後を遙かに見送つて、「この若者一定仕らうずると見え候」と申しければ、判官もたのもしげにぞ見給ひける。矢ごろ少し遠かりければ、海のなか一段許りうち入つたりけれども、なほ扇のあはひは、七段許りもあらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日西の刻

くしに定まらず

はれならずといふことなし



二のそ (筆三月形尾) 高宗市與

許りのことなるに、をりふし北風激しう吹きければ、磯うつ浪も高かりけり。舟はゆりあげゆりするて漂へば、扇もくしに定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には源氏くつば高みを並べてこれを見る。いづれもいづれも、はれならずといふことなし。與市目も、ふさいで、南無八幡大菩薩、別しては我が國の神明、日光の権現、宇都の宮、那須のゆぜん大明神、願はくはあの扇の眞中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に再びおもてを向かふべからず。今一度本國に歸さ

(一)豊臣時代の武
將佐野了伯の
こと、慶長六
年(二二六一
四年)歿、年四
十四

(二)宇治川の戦に
梶原景季と先
登を争つた故
雨雫と泣く

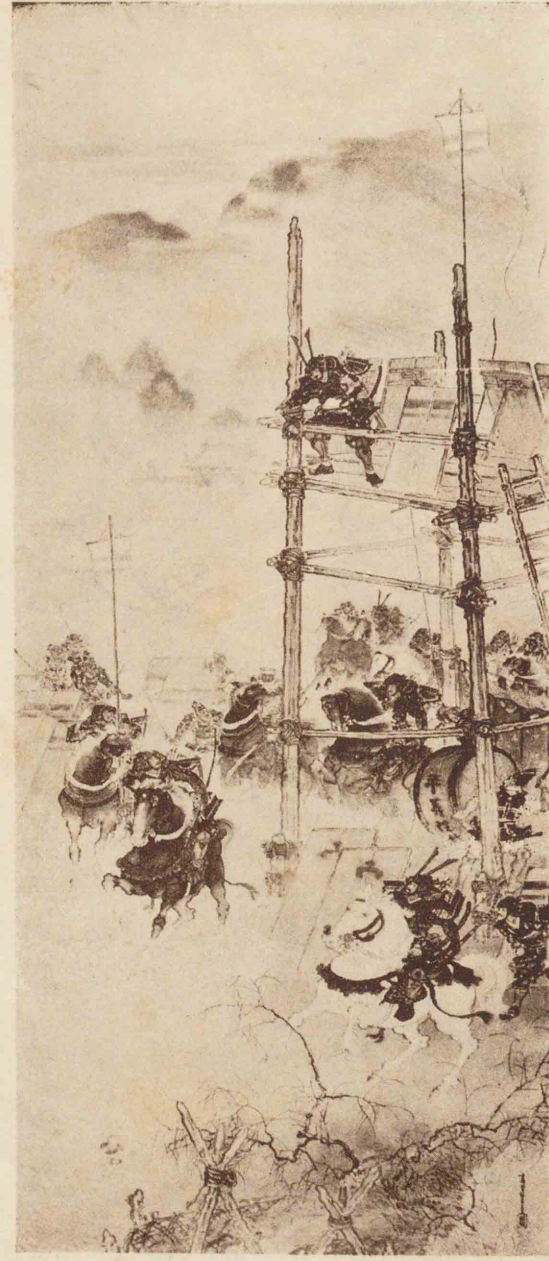
に心の徳といひて、外に徳をいはず、仁に愛の理といひて、外に理を
いはずそのいはずるところに深き意ありと知るべし。
それにつきて、一つの物語こそ候へ。相州北條の幕下、佐野の城主
天徳寺、豪健の勇
將なりしが、或時
琵琶法師を招き
て、平家を語らせ
て聞きけるに、未
だ語らぬ先に琵琶



佐野天徳寺琵琶を聴く
(小堀柄音筆)

琵琶法師にいひけるは、某はたゞ哀なることを聴きたくこそあれ。そ
の心得して語り候へ。といへば、法師「心得候。とて佐々木四郎高綱が
宇治川の先陣を語りけるに、天徳寺哀がりて、雨雫と泣きけり。さて
「今一曲前の如く哀なることを聴きたし。」といへば、那須與市宗高が

宇治川の先陣



猪飼嘯谷筆

扇の的を語りけるに、平家半ばより、天徳寺また落涙數行に及べり。後日に家臣のともがらに、過ぎし日の平家はいかが聴きつる。といふに、家臣ども、最もおもしろきことにて候。但し我等ども一つ心得ぬことこそ候へ。前後二曲共に勇烈なることにて、哀なる方は少しも候はぬに、君には御感涙に咽せられて候。これはいかがのことにて候ふにや、今や不審なることにいづれも申し合ひ候。といへば、天徳寺驚きて、たゞ今までは各をたのもしく思ひ候ひしが、今の一言にて、さてさて力を落して候。まづ佐々木が先陣をよく合點して見られ候へ。頼朝、舍弟の蒲冠者にも賜はらず、寵臣の梶原にも賜はらぬ生唆を、高綱に賜はるにあらずや。さればそのかひもなく、この馬にて宇治川を先陣せずして、人に先をこされなば、必ず討死して再び歸るまじと、頼朝に暇乞して出でける、その志を察して見られよ。哀ならぬことかは。とて屢涙を拭ひつゝ、暫しありていひけるは、ま

(一) 頼朝の弟範頼。
(二) 梶原景季。

武邊

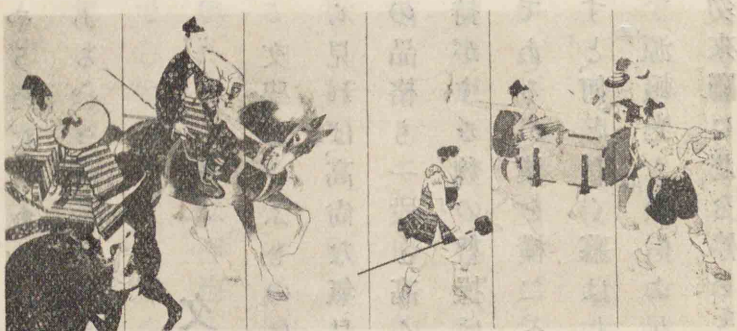


一のそ (筆雲紅東伊) きづけい

た那須與市も大勢の中より選ばれて、たゞ一騎陣頭に出でしより、馬を海中に乗入れて的に向かふに至るまで、源平兩家鳴りを静めてこれを見物するに、若し射損じなば、身方の名折たるべし、馬上にて腹搔切つて海に入らんと覺悟したる心を察して見られ候へ。武士の道ほど哀なるものは候はず。某は毎に戰場に臨みては、高綱、宗高が心にて槍を取り候ふ故、右の平家を聽く時も、兩人の心を思ひやりて、落涙に堪へざりき。然るに、各には哀になかりしと申さるゝにつけて思ふに、各の武邊はたゞ一旦の勇氣にまかせて、眞實より出づるにてはなきにやと思はれ候。それにては

迷惑す

惻隱

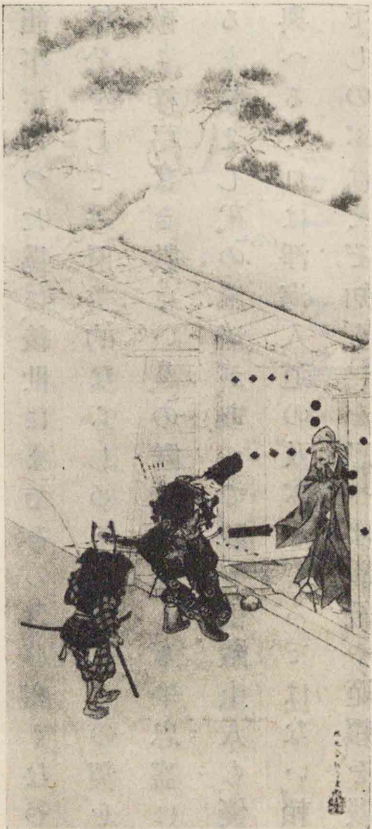


二のそ (筆雲紅東伊) きづけい

たのもしからずこそ候へ。といひしかば、諸臣皆迷惑して、辭なかりしとなり。これ天徳寺が武邊は涙より出づれば、もとより仁者にはあらねど、武の一筋は仁に根ざして、惻隱の心より發するにあらずや。然るに武は殺獲のことにて、手荒き道なれば、いはば仁とは黑白のたがひあるやうなれども、仁より出でざるは、眞の武にあらず。況んやその餘のことは、なほもて知るべし。されば忠孝も禮儀も、文道も武道も、内より油然として潤ほひわたりて發するにあらずれば、眞のものにあらず。これ則ち前にいひし人に情あり、ものの哀を知るの心なり。すべて諸の言行共に、義

(七)「有明の月もあかしの浦風に波ばかりこそよると見えしか」
(八)平清盛
(九)「陸奥のいほでしのぶはえそ知らぬ書きつくしてよ壺のいしぶみ」

(一)忠盛の子。一の谷の戦に戦死した。



平風流談のある忠のは、非常にその人品を高くするもので時にはその人の缺點まで掩ふ

やうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るものは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗返して俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗し

い永久な語草である。

(一)承久三年(一一八一年)後鳥羽上皇が北條氏討滅を企てられた時の亂。

(二)九月十三日の詩句

襟度
想望

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜がなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へたことがらである。それであるから、戦國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を読み得る人がなかつたなどといふのは、眞の武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜が深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違、吉野の花見には諸大名もまたそれぞれ詠歌をものしてゐる。上杉謙信が霜滿軍營の詩吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だと思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳はらないのは、何となくもの足らない心地がする。梶原

景時、明智光秀の時にとつての連歌などが、やゝその憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の妻臥病牀兒叫飢橋本景岳の誰知松柏後凋心、賴三樹三郎の誰題日本古狂生を初め、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事は永くその文學に傳はつて、忘れようとしても忘れられないやうになつてゐる。これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、却つて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩、一首の歌を留めて國難に斃れた人の方が、千秋萬古人の情緒を動かすであらう。

(一) 訣別の詩句
 (二) 獄中作の詩句
 (三) 辭世の詩句
 (四) 野村もと。出家して望東尼といつた。明治女丈夫。新勤王の

二二三 國民の歌

(一) 中西悟堂

(一) 詩人。僧侶。明治二十八年石川縣に生まれ、たて花巡禮。東京市武蔵野の著がある。

雲とたなびく櫻ばな
 咲いて且つ散るそのごとく
 大和男子の雄々しさを
 生きよ恵みの日の本に。

溢るゝ命夏の日の
 木草野山に亮てるごと、
 すこやかなれや大海の
 潮とも涌けや若やぐ血。

はた萬象の澄みわたる

秋の天地のその如く、
心を磨けもみぢ木の
錦を飾れその胸に。

嚴冬衝いて咲匂ふ
かの梅が香を、貞潔を、
學べや素朴健忍の
力を國の礎と。

あゝ皇國の大御代の
御稜威たゞへよ、み恵みの
あつきに生くる民草と
生きよ、心を協せつゝ。

二四 佐久間象山の歌

佐々木信綱

天才が時代を生むといふかたは、時代が天才を生むといふ考も出る。いふまでもなく藝術にとつて天才は大切であるが、無意識に受ける時代の影響は見逃すことは出来ない。また時代が人の心を緊張せしめ、活潑にせしめるやうな場合には、同じ天分の人でも意氣銷沈した時代に生まれた人よりは遙かにすぐれた仕事を遺すことが出来る。これを日本の古に考へて見ても、日本の文學が眞に緊張した響を傳へた時代には、必ず相當の出來事が社會的にも有してゐる。即ち人麿、赤人等の歌人に痛切なる響を遺さしめた時代は、壬申の亂によつて人々の心が緊張させられて居つた。平家物語に悲惨の作を傳へ、建禮門院右京大夫が哀切極みなき作を遺し、後鳥羽、土御門、順德三帝の御製に痛憤の意の深きを見る時代には、

(一)國學者。歌人。文學博士。明治五年三重縣に生まれた。日本歌學史。和歌史の研究。萬葉集選釋。おもひ草。校本萬葉集等著書は頗る多い。

(二)第八十二代。
(三)第八十三代。
(四)第八十四代。

(一)新葉和歌集、二十卷、元弘以後弘和に至るまでの歌を集めたもの。

源平の大亂に承久の亂が相繼いだ。新葉集に劔と劔と相摩するやうな痛烈な歌詠の多く生まれた時代には、その作者は吉野朝の悲運を支へて吉野に賀名生に住吉に轉々しつつ、京都方と望みのない戦闘をつづけてゐた。同じやうに、幕末の切迫した時期に際し、抑



佐久間象山

へることの出来ない慷慨の氣を負うて、幕府の苛酷な監視に會ひつゝも奔走し、た勤王の志士の中には、また金鐵の響ある佳品が多く生まれ出た。そしてそのやうに緊張した時代は、平時の普通人をも天才的なほどに、高潮させる。維新の志士として有名な人には、かくてまた、殆どすべてにすぐれ、それぞれ千古に傳ふべき慷慨忠誠の詠作のいくつかを遺してゐる。これ等の人々は、一面情熱的であつて、自ら歌人としての一面

高潮させる

悒々
(一)二五十四年。

(二)一巻、在獄中の諸感を五十七條に分けて漢文で記してある。

の性情をもそなへてゐたには相違ないが、また時代の力はかれ等の才能を一層鋭くさせたと見ることが出来る。今ここに述べようとする佐久間象山の如きも、實に多くの秀逸を遺し、それがまた鮮血の花をもつて和歌史を飾つたかの感のあるその一人である。象山は西洋諸國の軍艦の來航が年と共に多きを加へる情勢に焦慮して、しばしば海防に關して、建議したが、一度として幕府に用ひられず、悒々として樂しまなかつた。然るに安政元年吉田松陰の事に坐して幕府の怒に觸れ、七ヶ月の間を獄裡の身となつた。この獄裡の生活中に著はされたものに省響録がある。これは彼の感想録で、附録に詩と歌とが載せられてゐる。歌は雜詠十六首と感情百首とからなつてゐる。由來百首歌といふものは、古くから行はれたところで、平安末期からは殊に盛んに行はれたが、象山の感情百首の如く、獄裡に生ま

れた百首は恐らくは、これ唯一つであると思ふ。その感情に即し、生活に即した百首である點では、かの木下幸文の貧窮百首と、この感情百首とはまさに好一對といふべきものである。

この百首全體は、憂憤の氣に満ちてゐる。彼象山が幾度の建言も

春後沈木極五村謀其國蒙添料屈問暗中手相琴西象
儀志實測早と破虛証法と重載同萬江轉煥手我と國此
地何為僻一隅宜會東西言八作一家書學聲入骨髓聞見
養空疎世間少人傑津徒金所也

遂に用ひられず、外國軍艦は渡航し、更に松陰のことによつて獄中に起臥しなければ

ならなくなつた彼の立場を理解してこれを讀むならば、象山の憂憤のいかばかりであつたかが、明々として指摘することが出来る。この百首には、建言に關する感想、祈念、慨歎が多く詠み現されてゐる。即ち

こころみにいざや呼ばはむ山彦の

こたへだにせば聲は惜しまじ

には建言の容れられざるを歎く聲が響き、

君がため摘みし若菜ぞねあしくも

その葉はよけむ召せや我がせこ

は、支那の獻芹の故事によつて、建言の容れられんことを願つてゐる。更に、

荒磯に裳のすそ濡れて君がため

拾ひし貝を君召さずとや

これまた建言の容れられざるを歎いたものである。また

かずかずかに心を籠めし言の葉を

露ばかりだにあはれとや見よ

には、些かなりとも建言の容れられんことを願ふ心が現れてゐる。かくの如く象山は、また自分を顧ては、慨歎の聲なきを得ない。即ち

我が身を五月雨にたとへて晴るる時なき心を、
いつとても晴れぬ思に五月雨の
ふり果てぬらむ我が身悲しも
とかこち、また三月入獄して、獄裡に四月を迎へては、卯の花の盛り
に思ひ合はせて、

憂き事のある時に咲く花なれば

世にうの花の名をや負ふらむ

と我が身を顧る。然しその不遇を顧ては、辛酸勞苦も遂に水泡に歸
して、誰知る者もなくなるのではないかとの不安も生じて、
橘の香をなつかしみ後の世に
今をも忍ぶ人やあるべき
の五月の花橘にたとへて、顧ずにはゐられない。が夜光の珠も初は
人に知られなかつたことを思つて、

城にかへしもろこし人の白玉も

早くは石の名を負ひしとか

と僅かにみづから慰撫するのであつた。

昔よりかたりもつぎつまめにして

うとまれぬるはわれ一人かは

これまた古人の苦衷をしのんで自分を慰めた歌に他ならぬ。然し
また、象山はその熱烈なる希望に思ひを馳せては、

蝦夷島や千島の外に舟うけて

君のゆるさばおきな釣りてむ

と、海外渡航の志を表し、或は、

はるばるとさかる伊豆島ゆげ舟に

近よる君を見ぬがわびしき

と、米艦に便乗せんとした吉田松陰を思ひ、また古歌を引用して技

巧の巧をも見せてゐる。即ち
忍びあまりあめりか舟のよるばかり

袖に港のさわぐ頃かな

は、伊勢物語に「おもほえず袖に港のさわぐかな唐土船のよりしばかりに」の歌を思つたもの、また

わが身こそ憎からめどもわが宿の

柞の紅葉あはれとは見る

は萬葉集なる、われこそはにくくもあらめわがやどの花橘を見に
はこじとや」によつたものである。また汽船のことをゆげ船といつ
てゐるなど、當時の時代といふものが分つて面白い。さてそれ等も
るもろの佳品ある中にも、

世を憂しと心に知れどしかすがに

捨てなむとはた思ひはなれず

いとほしき世とは知れども行末の

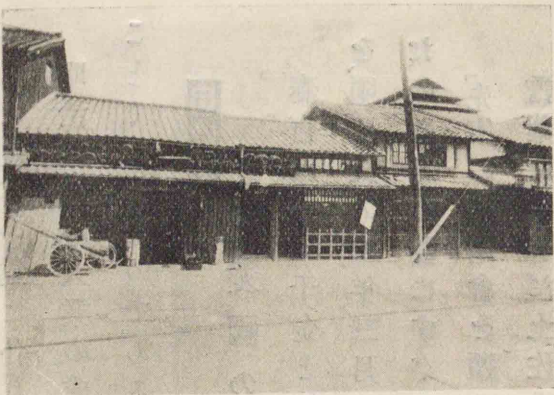
知られぬからに心引かれつ

行先をたのむ心にこりずまの

うらみんとしも思はざりけり

象に至つては、眞に憂世の志士の詠作とし
山て、萬事を放擲したる憂國の念を感じる
終 ことが出来る。ここに至つて、遂に象山の
焉 姿は朗々としてその光を輝かしてゐる
の 地ものとする事が出来る。

象山はかくて、安政元年九月獄を出て
より、故郷なる信州松代に歸り、九年の閉
居の後容され、再度の徵命に應じて、元治元年春三月遂に京都に赴
いた。時勢は移つて攘夷論の囂々たる時であつたが、象山一人は開



(一)二五二四年。

(一)評論家。大衆作家。明治二十七年鳥取縣に生まれた。國際政治の革命論。國際聯盟の概論。ムツンリイ等の著がある。

(二)春宵一刻値千金(蘇軾)

(三)第百二十一代孝明天皇の御代。二五二二年。

(四)幕臣。名は安芳。通稱麟太郎。維新後、朝廷に仕へて伯爵を授けらる。

(五)名は直彌。彦根藩主。萬延元年(二五二二年)三月三日、薩摩浪士の爲に殺された。

明治三十一年(一八九八年)七月七日、芳村に於て、

國論を稱へて譲らず、薩長の人々にその身を案ぜられたが人定命ありといつて敢然京都にあつて奔走した爲、遂に元治元年七月十一日に刺客の爲に仆れた。

明治維新の大業の成つたのは、實に彼が凶刃に仆れた四年目のことであつたのである。

自修文

愛國の至情

澤田謙

春宵は一刻千金と値はきまつたものである。そのおぼろ月夜を、頃(三)は文久二年三月二十四日、たゞ一人勝海舟の立關先へ立つたのは、身丈群にすぐれた青年武士であつた。

「先生に御面會を願ひたい。」

言葉にはまだ土佐訛りがぬけなかつた。

文久二年三月といへば、井伊大老が櫻田門外の雪を鮮血に染めてから、ちやうど二年目である。井伊なき後は勝といふのが、そ

の頃敵も味方も認めるところであつた。軍艦奉行を勤める勝安芳こそは、倒れんとする幕府を支へる一本の柱だ。

「勝さへやつつけてしまへば」

それが勤王攘夷黨の輿論であつた。随つて物騒なその頃に、わけて勝の身邊は危かつた。その勝の立關に、のつそりと現れたのが、土佐訛りのまだ年若い武士だつた。時節柄、物騒千萬な訪問客である。

「して御貴殿は」

「以前は土佐の藩士、いまは浪人の身で、坂本龍馬と申す。ちと先生の御意見を承りたくて参つた。よろしくお取次をお願い申す。」

堂々と姓名を名乗つてゐる。悪びれたところはない。

その時、勝海舟は、廊下傳ひに離れの一室、南向の圓窓の下に紫檀の机を据ゑ、端坐して書見に餘念もない。

「先生、坂本といふ男、何とも、うさん臭い男でござります。お會ひ

(一)勤王家。土佐藩士。慶應二年(二五二六年)京都で、近藤勇等の爲に暗殺せられた。三十三歳。

端座 正しく座すること。

なされぬ方が……」

「大事な、通せ。」

「然し……」

「正面立關から堂々と乗込むくらゐなら、刺客でも一流ぢや、愛すべきところがある。よろしい、通せ」

海舟は机の前に端坐した膝を崩さ

坂うともしない。取次の門弟は止むなく、

馬 龍 本 坂
龍馬を案内に立つた。

龍馬は導かれる儘に、幾室かを通り

すぎた。廊下をぐいと鍵手に廻ると、海

舟の隣室である。襖は開放つてあるので、海舟が讀書に耽つてゐる姿がその儘に見える。

龍馬は思はず、はつと立停つた。

何といふ落着きだらう……」



兩刀を隣室の襖際において、一步坐敷に足を入れかけた。これは長上を訪問する時の禮儀だ。

突然紫檀の机の前から聲があつた。

「帯刀の儘、帯刀の儘。」

穩かではあるが、底力のある犯しがたい調子である。

龍馬は一旦おいた刀をと

勝り上げて、つと座敷に入つた。

海 春闌けたれど、夜となれば、冷

舟 冷とする。勝は胸をかき合は

せながら、龍馬の方へくるり



と膝を向けた。

龍馬は疊についた兩手の肱を、ぐつと張つて挨拶をした。當時の志士は、好んでかういふ禮をした。

「當節は物騒な世の中ぢや、いつなん時、如何なる禍が身に及ば

うも知れぬ。武士のたしなみぢや。帶刀は寸時も身を離してはな
りませぬぞ。」

さういふ海舟の膝の脇にも、いままで鹿の角の刀掛にかかつ
てゐた祕藏の一刀が、艶やかな鞘を燈火に輝かしてゐる。

「今宵何故にお手前が、何しにここに來られたか、俺には判つて
ゐる。眉間の間に殺氣が溢れてゐるぞ。ぢやが……」

そこで海舟はちよつと息を切つた。龍馬はぎくりと吐胸を突
かれた。その通りである。彼は熱心な攘夷論者である。十九の歳に

江戸に出で、千葉周作に劍道を學んだ。世をみると開港論が高い。
しかもその首唱者は勝海舟だ。おのれ勝の奴とは思つたが、海舟

ほどの人物が、無暗なことを主張する筈もあるまい。
「よし、一度勝を訪問し、果して世間でいふ通りなら、一刀の下に
切捨ててやらう。」

それが龍馬の訪問であつた。肚裡滿腹の決心が、自ら眉宇に現

(一)劍客。北辰一
刀流の祖。安政
二年(一八五五)
五月(一八五五)
十三年(一八六六)歿。

れたのも無理はない。

が、勝の態度は飽くまでも落着いてゐた。

「ぢやが、人には各、天命がある。お主が死體になつてこの邸から
運びだされようも、それは天命だ。ここでお主に刺されようも

それも俺の天命ぢや。俺はそれを避けようとは思はぬ。然し俺
の意見は是非とも聞いて貰はねばならぬ。」

「それを承はる爲に推参いたしたのでござる。」
「よろしい。勝は咳拂をした。」

雲となるか、雨となるか、生命がけの對談である。雙方の手には
力強く一刀が握られてゐる。

「貴殿は、たいい世界の、大勢を何と見てゐるか。」
「淨々と吐き出した海舟の開港論。歐米陸海軍備の盛大なこと

我が海軍の微々として振はざること、彼我兵器の精粗から、戦略
の優劣、富の程度の懸隔まで、説き去り説き來つて、數千萬言。海舟

淨々

はもとより當時に有名な雄辯の士である。加ふるに彼は萬延元年、幕府の遣米使として、米大陸の新文明に接してからは、當時第一流の識者であつた。

「さて世界の大勢が、既にかくの如き場合、お主たちは何をもちて攘夷を行はうとするのぢや。先年浦賀に現れた米艦とその周圍に集つた和船とを見られたか。彼我の相違はさしづめあれぢや。心は如何に逸つても、岩に卵を打ちつけて、喧嘩がなるものかなう、そこぢやぞ。俺ぢやとて、天下滔々として攘夷論の行はれる當節、衆に逆つて開港論を唱へれば、身の危いぐらゐのことは百も承知ぢや。千も承知ぢや。だが然し、如何に身が危くとも、國を謬るやうな暴論には、同意することは出来ない。今は舉國一致して兵制を改革し、海軍を創設する。我より進んで交易を求めて、我が國富を増進するのが、何をさしおいても目下の急務ぢや。」

かういふ海舟の眼には、涙こそ見えぬ、國を思ふ一念の熱血が燃えて、悲壯にすら見えたのであつた。

龍馬はいつか首垂れてゐた。聞きしに勝る勝の博見卓説に打れた。勝の最後の言葉が終つて、きつと口を結んだその凜たる顔を仰ぎみた時、何思ひけん坂本龍馬は、柄も碎けよと握りしめてゐた帯刀を、傍に捨てて二三尺ばかりさがつたのち、疊に兩手をつかへて平伏した。

「先生、どうか私を門下の一人に加へて下さい。日夜修養して、いささか君國の爲に盡くしたいと存じます。」

海舟はなほも、この愛すべき青年の姿を飽かず眺めてゐた。何故だらう。何故坂本龍馬は海舟の前に首を垂れて、みづから門弟となつたのであらう。

勝海舟の威武に怖れたのか。何故なら、勝海舟は、もとより海舟は、劍道の達人であつた。劍をとつては、山岡鐵舟、

〔舊幕臣。通稱鐵太郎。維新後、朝に仕へて、子爵を授けられた。明治二十一年薨。〕

(一) 舊幕臣。通稱
精一。槍法な
以て。世に知ら
れる。明治三年
六十九年歿。

高橋泥舟と共に、天下の三舟とまで稱せられた使ひ手である。如何に劍道に自信があつたかは、刺客と知つて平然と、居間に招じたのでも判る。然し、これほどの劍客を、正面玄關から堂々と訪れて來た彼龍馬である。自分の劍にもいささか自信があつたらう。若し武運拙くば生きては歸らぬ覺悟であつた。決して海舟の威武に屈したのではない。

では海舟の雄辯に説き捲くられたのか。さうでもない。海舟は、西郷南洲とのあの有名な江戸城明渡し（一）の談判に至る最後まで、幕府の柱石として健闘して來たのは人も知る通りである。坂本龍馬はまた、海南の飛龍として、薩長の提携、討幕の大業の成就に、最後まで朝廷方の志士であつた。これも人の知る通りである。海舟の門下に入つたのであらうか。海舟の雄辯ばかりではない。その卓見ばかりでもない。その背

經綸
天下、國家を
治めんとす
こと。

後に、烈々として焼くばかりの愛國の至情である。彼が國家の經綸を説くに當つては、幕府もない、長州も薩摩もない、土佐も肥前もない。たゞ一日本國の運命だけなのだ。この國際的に多難なる日に當つて、日本の國をどうするか、その爲には身命を賭しても闘ふといふ、その熱烈なる至情が、感じ易い純眞な青年の胸を、強く打つたのである。

「勝先生は幕府方だ。俺は朝廷方だ。いかなる因縁かは知らぬが、これだけは終生渝るまいが、如何に黨派はちがつても、國を思ふ至情に至つては、全く同じではないか」

かうした考が、坂本龍馬の若い胸に油然として涙と共に浮かび上つたのである。

かくして勝海舟と坂本龍馬とは、いはゞ敵同志の間にてありながら、先生よ弟子よと呼ばれつゝ、同じ釜の飯を喰ふ仲となつたのである。

身を挺す
人より先にぬ
き出でて事
にあたること
維新の元勳
士佐高知藩主
名は豊信、明
治五年歿、年
四十六
周旋
人の世話をする
こと

この師弟の麗しい交情は、遂に終生渝らなかつた。勝先生刺客にねらはれて危しと聞くや、身を挺して助けたのは坂本龍馬であつた。龍馬が藩主山内容堂公の怒に觸れて、土佐藩を追はれてゐたのを、周旋して歸藩せしめたのは勝海舟であつた。この美しい師弟關係については、坂本龍馬が家郷の姉乙女子に次の如く書き送つてゐる。
「今にては日本第一の人物勝麟太郎殿といふ人の弟子になり日々兼ねて思付所をせい出し居申し候」
或はまた
「この頃は天下無二の軍學者勝麟太郎といふ大先生の門人となり、殊の外かはいがられ候て、まづ、きやくぶんのやうなものになり申し候」
とある。大體その間柄がわかるであらう。

二五 人臣の道

北畠親房

(一)吉野朝の忠臣
正平九年(二
〇一四年)薨
年六十三、
皇正統記、神
原抄、古今集
註等の著があ
る

きほひ争ふ

前車の轍

凡そ王土に生まれて忠を致し命を捨つるは、人臣の道なり。必ずこれを身の高名と思ふべきにあらず。されども後の人を勵まし、その跡を憐びて賞せらるゝは、君の御政なり。下としてきほひ争ひ申すべきにはあらぬにや。ましてさせる功なくして、過分の望をいたすこと、自ら危うするはしなれど、前車の轍を見ることは、まことに有難き習なりけんかし。中古までも、人のさのみ豪強なるをば戒められき。豪強になりぬれば、必ず驕る心あり。果して身を滅し、家を失ふためしあれば戒めらるゝもことわりなり。
(二)鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することを停むべし。といふ制符たびたびありき。源平久しく武をとりて仕へしかども、事ある時は宣旨を賜はりて、諸國のつはものを徴し具しける

(二)第七十五代崇
徳天皇の御代
鳥羽法皇院政
を攝せられた
頃
制符

語らる

に、近代となりて、やがて語らるゝやから多くなりしによりて、この制符は下されにき。果して今までの亂世の基なればいひがひなきことになりけり。



言語は君子の樞機
堅き氷は霜を履むより至る
亂臣賊子

輕しさも推しはからるゝものなり。言語は君子の樞機なり。といへり。あからさまにも君を蔑にし、人に驕ることはあるべからぬことにこそ。堅き氷は霜を履むより至る習なれば、亂臣賊子といふもの

北 或は家の子、郎從節に死ぬるたぐひも
皇 あれば、我が功におきては日本國を賜
親 へ。若しは、半國を賜はるとも足るべか
房 らず。などぞ申すめる。誠にさまで思ふ
ことにはあらしなれど、やがてこれよ
り亂るゝはしともなり、また朝威の輕

(一)堯の時の隱士

(二)支那上古の君

(三)支那河南省開封府

(四)堯の時の隱士

五臟六腑

萬姓の主

は、その初め心詞を慎まざるより出でくるなり。世の中の衰ふると申すは、日月の光の變るにもあらず、草木の色のあらたまるにもあらず、人の心の悪しくなりゆくを末世とはいへるにや。昔許由といふ人は、帝堯の國を傳へんとありしを聞きて、潁川に耳を洗ひき。巢父はこれを聞きて、この水をだにきたながりて、渡らざりき。その人の五臟六腑の變るにはあらず。よく思ひならはせる故にこそあらめ。
なほ行末の人の心想ひやるこそあさましけれ。大方おのれ一身は恩に誇るとも、萬人の怨を殘すべきことをばなどか顧ざらん。君は萬姓の主にてましますせば、限りある地をもちて、限りなき人に頒たせ



(筆折不村中) ずは飲に流汚父巢

高祖の主
 給はんことは、推してもはかり奉るべし。若し一國づつを望まば、六十六人にて皆ふさがりなん。一郡づつといふとも、日本は五百九十
 四郡こそあれ、五百九十四人は悦ぶとも、千萬人の人は悦ばじ。況んや日本の半ばを心ざし、みながら望まば、帝王はいづくを知らせ給ふべきにか。かゝる心の萌して言葉にも出で、面にも耻づる色のなきを、謀叛のはじめといふべきなり。昔の將門(一)の比叡山に登りて大内を遠見して、謀叛を思ひ企てけるも、かゝるたぐひにやありけん。昔は人の心正しくして、自ら將門に見も懲り聞きも懲りはべりけんを、今は人々の心かくのみなりにたれば、この世は愈、衰へたるにや。

(一) 平良將の第三子。下總猿島に偽宮を建てて、朝儀に擬へた爲に、天慶三年(一六〇〇)遂に誅せられた。

(二) 漢帝の第一代。姓は劉。名は邦。

籌を帷幄の中にめぐらす

漢の高祖(二)の天下をとりしは、蕭何、張良、韓信が力なり。こを三傑といふ。萬人に勝れたるを傑といふとぞ。中にも張良は高祖の師として、籌を帷幄の中にめぐらして、勝つことを千里の外に決するはこ

(一) 後鳥羽天皇の文治五年(一八四九年)。

(二) 藤原泰衡。

(三) 畠山重忠。

(四) 昔は奥州五十四郡。

の人なり。」と宣ひしかど、張良は驕ることなくして、留といひて少しきなる所を望みて、封ぜられにけり。あらゆる功臣多く滅びしかど、張良は身を全くしたりき。近き世のことぞかし、頼朝の時までも文治の頃にや、奥の泰衡(二)を追討ちしに、みづから向かふことありしに、平重忠(三)が先陣にてその功勝れたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とて、きはめたる少き所を望みて、賜はりけりとぞ。これは人に廣く賞をも行はしめん爲にや、賢かりけるをのこにこそ。

— 神皇正統記 —

二六 尊皇の精神

我が國民が皇室に對して厚い忠誠の念をもつてゐることは、上古以來少しも變らぬ。武家時代、大權の下に移つたのを見て、全く尊皇心がなくなつた時代と思ふのは皮相の見に過ぎぬ。外人などは

皮相の見

(一)勤王家。山陽の第三子。安陽政六年(二五九)の爲刑に處せられた。幕府三十五

掌握

往々さういふことをいふ。これは自分等の國柄から考へるからである。權臣が寵恩に慣れて專横な政をしたり、將軍が兵馬の權を握つたりした事實は、國史の上では勿論面白くない現象に相違ない。然しその間は、賴三樹三郎が歌つたやうに「天邊大月缺、光明」の時代で、言はば浮雲が天日を蔽うたのである。決して本來の日がなくなつたのではない、天下の人は皆天日の空にあることを知つて居つたのである。兵馬の權を掌握した公方様でも、やはり天皇の臣下で、天皇から爵位を戴いてゐることを知つて居つた、天皇の御代理として國民の上に立つてゐると信じて居つたのである。天皇が政治からお離れになつても、天皇の御威光は少しも衰へては居らぬ、却つて益、神聖なものと思はぬが、九重深くまします禁裏様を拜めば、目が潰れると信じて居つた。藤原氏の攝政關白時代でも同様

幼冲

通曉

(R. H. Chamberlain. 言語學者。イギリスの人。西曆一八五〇年) 元東京帝國大學講師

爲政者

磅礴

で、幼冲の天子を擁立し奉りて、攝關が政權を恣にしても、皇室の尊嚴なることは少しも變らぬ。攝關時代も、武家時代も、そこに何等の差別はない。攝政や、關白や、將軍や、彼等自身もまた政權を握つてはゐるが、皇室を尊敬し奉るの念を失はず、朝廷の恩寵を笠に着て、下に號令したのである。西洋人は國史を見てもその皮相を見るのみであるから、武家時代は國民が全く朝廷を忘れた時代かと早合點する。久しく日本にゐて、日本文學に通曉してゐる、^(一)チャンバレン氏でさへ、やはりさう信じてゐる。それで徳川以來起つて來た水戸の尊皇論、國學者の愛國論を以て、一旦廢れたものの復興のやうに考へ、今の教育は全くミカド崇拜を教へる爲に、爲政者が工夫したもののやうに論じてゐる。焉んぞ知らん、我が尊皇心は、攝關時代も、武家時代も、一貫して國民の間に磅礴して居つたことを。そは藤田東湖の正氣の歌に、

神州誰君臨、萬古仰天皇、皇風治六合、
明德侔太陽、不世無汚隆、正氣時放光。

といつた通り、歴代時々現れてゐる。民主的王国たる英國の國民には、どうしても日本の尊皇心は了解が出来かねるのである。我が國文學を見れば、常にこの精神が發揮せられてゐる。見よ見よ、上代の祝詞は祭祀の文學にして、即ちマツリゴトの詞である。柿本人麿の長歌は更にこれを抒情歌に應用して、奈良時代の雄大な長歌を成し得たもので、常に神代より説起し、山川もよりて仕ふる大君と歌つたのである。和歌を基礎として起つた平安時代の物語日記は、つまり朝廷のみやびを寫し、その儀禮を記載したものである。紫式部にしても、清少納言にしても、低い身柄でありながら、身は月卿雲客と伍して至尊に近く侍つた名譽を筆述したのである。これを無上のほまれと思惟して、宮中の見聞を記載したのである。然

(一) 持統天皇吉野宮に行幸の時柿本人麿の作つた長歌の一節に山川もよりて仕ふる神の御代か」とある

思惟

(一) 醍醐天皇の御年代(一五六一年—一五八二年)

るべき人の女などは、禁中に宮仕されるがよいといひ、宮中の御模様を見ては、常に有難涙のこぼれることを叙してゐる。枕草子は全部がその時代の懷舊談である。これ等の書物の讀者もまたこれによつて宮中の模様を餘所ながら覗ひ知ることを喜んで、面白く讀んだのである。延喜時代に和歌の勅撰集が始つて以來、歌人は勅撰集にその詠に入るのを無上の名譽と感じた。歌と朝廷とはここに全然離るべからざるものとなつた。太古から存在して、形式も言語も純日本であるところが、皇室と同じである。敷島の道と稱し、葦原の道の名のあつたのもこれが爲である。近世の慷慨家に歌人が多く、歌人が常に尊皇家であつた理由も、これで理解せられる。平家物語などの軍記物語、その一轉して劇化せられた謠曲の類が常に神祇を尊び、皇室を崇めることはいふまでもない。概して厭世主義のはびこつたといふ鎌倉、吉野時代の文學にも、

竹の園生

有職故實

尊皇の思想は絶えず繰返されてゐる。御門の御位はいとも畏し、竹の園生の末葉まで人間の種ならぬぞやんごとなき。衰へたる末の世とはいへど、なほ九重の神さびたる有様こそ世づかずめでたきものなれ。などといつてある。かく朝廷を崇める思想が即ち有職故實の學問の起つた所以である。何事も古き世のみぞ慕はしき」といふので、平安朝の典雅なみやびをしのぶ當時の時代精神を成し、随つて所謂擬古文は徳川時代の國學者が作り始めたのでなく、既に鎌倉時代に起つてゐる。徳川時代の戯曲、小説は多く武士道を主としてゐるので、朝廷を歌はないが、直接に朝廷をおとしたものは一つとしてない。況や徳川時代には國學者の歌文に於ても、漢學者の詩文に於ても、尊皇を歌つたものは、時代の切迫と共に益、多くなつて來た。

れを要するに、太古から今日まで、何時の世、如何なる文學を見ても、皇室に對して不平がましい言は半句としてない。國民が朝廷を忘れたやうに見える時代はあつても、決して忘れたのではない、衷心からの尊敬心は毫も渝らなかつた。この國土は即ち皇室と共に存在する、諸冊の兩尊國土を産ませられて、次ぎに天照大神を生ませられたといふ土代思想は、嚴として遺つてゐるのである。

西洋では王室と國土との關係が密接でない。外國の王族は二三百年の昔に遡れば、地方の豪族ぐらゐなのが多い。それ故祖國を護れといふことを教へる。且つ大抵の國歌は、國民の自由を歌ひ、國家の繁榮を歌ふことが主になつてゐる。米國のはもとより、英吉利の⁽¹⁾ル・ブル・ブリタニヤでも、佛蘭西の⁽²⁾マルセーユでも皆それである。よし國王を歌ふにしても、⁽³⁾「神よ國王に幸あれ」と國王以外に、ゴッドを考へてゐる。我が國の君が代はたゞ簡單に御代長久を祝してある、

⁽¹⁾ Rühr Britanien.
⁽²⁾ La Marseilles.
⁽³⁾ God.

それが即ち国歌である。皇室の繁榮は即ち國家の繁茂である。而してまた臣民の繁榮である。これを區別して歌ふ必要はない。諸外國は最初から皇室と國土とが離れてゐる國風である。政體が幾變遷し、主權者が幾たび新たにならうとも、國家は依然として存續するであらう。これに反して、我が日本は皇室と國土は切つても切られぬやうに結付いてゐる。皇室の御繁榮は即ち國家の繁榮であることを知ると同時に、皇室なくして日本國もなく、日本人も存在し得られぬといふことを深く念はねばならぬ。

改新帝國讀本 卷六終

附 録

送 假 名 一 般

あからむ	赤らむ	いさまし	勇まし	うすく(う)す	薄くす
あがる	上る	いそがし	急がし(忙し)	うすつく	白つく(春く)
あきたらず	嫌らず	いたはし	痛まし、傷まし、悼まし	うたがはし	疑はし
あきらかに	明らかに	いたまし	烏にぞ、惡にぞ、曷にぞ、何くにぞ	うづまる	埋まる
あちはふ	味はふ	いつくにぞ	烏んぞ、惡んぞ、焉んぞ、安んぞ、曷くんぞ	うとくす	疎くす
あつく(う)す	厚くす	いつくんぞ	厭はし	うとんず	疎んず
あつまる	集まる	いとほし	況や	うらむらくは	生まる、産まる
あはす	合はす(併す)(協す)	いはんや	思まはし	うらやまし	恨むらくは、憾むらくは
あはせて	併せて、合はせて	いまはし	今めく	うれしが	羨まし
あへて	敢て、肯て	いやくむ	賤しむ、卑しむ(陋む)	おい	嬉しが
あまりに	餘りに	いらだつ	苛だつ	おこす	於て
あまんず	甘んず	いろづく	色づく	おそる	興す、起す
ありがたき	有り難き	いろどる	色どる、(彩る)	おそろし	興る、起る
あやしむ	怪しむ(異む)	うかぶ	浮かぶ(浮ぶ)	おとろかす	怖ろし
あらはる	新た	うごかす	動かす	おほしめし	追つて
あるひは	現る、現す			おもく(う)す	音なふ
いかでか	或は			おもんず	驚かす、愕かす
いからず	争でか			おもんみるに	思召し
	怒らす			かがやかす	重んず
				かか	重なる
				かしこまる	輝かす、燦かす
					懸かる
					畏まる

送假名一般

かたく(う)す 堅くす、固くす
 かたじけなく(う)す 辱くす
 かたまる 堅まる、固まる
 かなしがる 悲しがる
 かなしむ 悲しむ
 かならずしも 必ずしも
 かねて 豫て
 かねて 兼ねて
 かはる 變はる
 かへつて 却つて、反つて
 がへんす 背んす
 からうじて 辛うじて
 からく(う)す 軽くす
 かるく(う)す 枯ればむ
 かねばむ 乾かす、燥かす
 かるんす 乾かす、燥かす
 かわかす 氣掛り
 きがかり 聞ゆる
 きこゆる 傷つく、創つく
 きすつく 極まる(窮る、究る)
 きはまる 黄ばむ
 きはむ 極めて
 きはめて 清くす
 きよく(う)す 清まる、淨まる
 きよまる 腐らかす
 くさらかす 梳る
 くしけづる

くださる 下さる
 くちそぞく 嗽ぐ
 くらます 暗ます
 くらふ 食ふ
 くるしむ 苦しむ、困しむ
 くるはず 狂はず
 ころみ 試みる
 ころよし 快し
 ことにす 異にす、殊にす
 このまし 好まし
 こはばる 強ばる
 こやす 肥やす
 こらす 凝らす
 ころがす 轉がす
 さいはひに 幸に
 さかさまにす 倒まにす
 さかんに 盛んに
 さきだつ 先だつ、前だつ
 さきんす 先んす、前んす
 さだかに 定かに
 さだめて 定めて
 さます 覺ます
 さわがし 騒がし、躁がし
 さをさす 掉さす
 しかしながら 併しながら
 しかるに 然らば
 然るに

しかれども 然れども
 しきりに 頻りに、切りに
 したしむ 親しむ
 したはし 慕はし
 しつかに 靜かに
 しつまる 靜まる、鎮まる
 しはらく 暫く
 しひて 強ひて
 しらす 知らす
 すくす 過ぐす
 すくふ 巢くふ
 すくなくとも 少なくとも
 すくなくし 過ぐす
 すごす 過ぐす
 すべて 總べて、惣べて(都て、凡て、渾て)
 すまふ 住まふ、棲まふ
 せまく(う)す 狭くす
 そこなはる 害はる、賊はる
 そぼだつ 側だつ、敬つ
 そはる 添はる、副はる
 そまる 染まる
 そらんす 諳んす
 それ 夫れ
 たがひに 互に
 たくましく(う)す 逞しくす
 たくみに 巧みに

たたかはず 戦はず、鬪はず
 たたく 正しく
 たたく(う)す 正しくす
 たたまる 疊まる
 たちどころに 立地に
 たちまちに 忽ちに
 たつさはる 携はる
 たとへば 例へば、譬へば
 たのしむ 樂しむ
 たのもし 頼もし
 たまる 溜まる
 たまはる 給はる、賜はる
 ちかづく 近づく
 ちかよる 近よる
 ちらす 散らす
 ついで 次いで、尋いで
 ついては 就いては、附いては
 つかはす 遣はす、使はす
 つぎに 次ぎに
 つくす 盡す、竭す、殫す
 つとめて 務めて、勉めて
 つまびらかにす 詳かにす
 つまひやす 費やす
 つまむ 摘む(撮む)
 つらなる 列る、連る、聯る
 つらぬく 貫く、串く
 つるす 吊す

つあつく 杖つく
 てづから 手づから
 てらす 照らす
 とかす 解かす、融かす
 ときめく 時めく
 とどろかす 轟かす
 とほごかる 遠ざかる
 とどまる 富ます
 ともなふ 止まる
 とともにす 伴ふ
 とらふ 俱にす、與にす、偕にす、共にす
 とりにこす 捕ふ、捉ふ
 とらばす 擄にす
 ながらく 長らく、永らく
 なげかし 歎かし
 なげかはし 歎かはし、慨かはし
 なつかし 懐かし
 なつく 名づく
 なびかす 靡かす
 なやまし 惱まし
 ならす 鳴らす
 ならはす 習はす
 ならびに 並びに
 なんすれぞ 何すれぞ、何爲れぞ
 にぎやか 賑やか

にくらし 懼らし
 になふ 擔ふ
 にほはし 匂はし
 ぬかつく 額づく
 ねかす 寝かす
 ねたまし 妬まし
 ねむたし 眠たし
 のぞまし 望まし
 のぞむらくは 望むらくは
 のどけし 長閑けし
 のぼす 延ばす
 はがす 剥がす
 はかどる 抄る
 はげます 勵ます
 はさまる 夾まる、挟まる
 はたして 果して
 はたらき 働き
 はずかし 恥かし、羞かし
 はなはだしく 甚だしく、酷しく
 はなはだしく 甚だしく
 はやまる 早まる
 はやく(う)す 早くす
 はるけし 遙けし
 はるかに 遙かに
 ひくく(う)す 卑くす、低くす
 ひそまる 潜まる

ひそかに	竊かに	みにくし	醜し	よつて	因つて、依つて
ひとり	獨り	むかふ	向ふ	よろこばし	喜ばし、悦ばし
ひとしく	等しく、均しく	むしばむ	蝨ばむ(蝨む)	わかす	涌かす、沸かす
ひろがへつて	翻つて	むつまじ	睦まじ	わかやく	若やく
ひろがる	弘がる、廣がる	むなしく(う)す	虚しくす、空しく	わかつ	分つ
ひろく(う)す	廣くす	めあはず	女はず、妻はず	わかれ	分れ
ひろまる	廣まる、弘まる	もしくは	若しくは	わかる	分る
ふさがる	塞がる、窒がる	もつてす	以てす	わける	分ける
ふたつながら	兩つながら	もつばらにす	専らにす	わづかに	僅かに、纔かに
ふとく(う)す	太くす	もらす	漏らす、洩らす	わづらはし	煩はし
ふところにす	懐にす	やすく(う)す	安くす、靖くす	あながら	坐ながら
ふるつて	奮つて	やすけし	安けし	あがく	畫がく(描く)
ふるふ	振ふ、震ふ、奮ふ	やすまる	休まる	あしむ	愛しむ、惜しむ(吝む)
へらす	減らす、耗らす	やすらかに	安らかに	まはり	終り
ほしいますまにす	恣にす、擅にす	やすらけし	安らけし		
ほりだす	掘り出す	やすらふ	休らふ、息らふ		
まさしく	正しく	やすんず	安んず、靖んず		
まうけ	設け	ゆたけし	豊けし		
またがる	跨る	ゆびさす	指さす		
まつたく(う)す	全くす、完くす	ゆめみる	夢みる		
まとはす	纏はす、絡はす	ゆるかせにす	ゆるかにす		
まどはず	惑はす	ゆるやかにす	過ぐる		
まろばす	轉ばす	よく	能くす、克くす		
まおらす	參らす	よこたはる	横たはる		
みたす	満たす、充たす	よこたふ	横たふ		
みだりに	猥りに、濫りに				
みちびく	導く				

浦野製

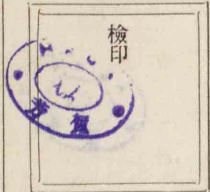
改新帝國讀本 附

昭和四年九月二十五日印刷
 昭和五年二月十五日訂正再版印刷
 昭和五年二月八日訂正再版發行

編者 芳賀矢一
 訂補者 上田萬年
 同 長谷川福平
 發行者 東京市神田區通神保町九番地 富山房
 代表者 坂本嘉治馬

昭臨	和時	五定	年度
卷一、二 各金七拾參錢	卷三、四 各金七拾七錢	卷五、六 各金六拾七錢	卷七、八 各金六拾七錢
卷九 各金五拾七錢	卷十 各金五拾四錢		

發行所 富山房
 東京市神田區通神保町九番地
 電話九段一九二—一九三五番
 振替口座東京五〇一番



三十三

遠藤俊男